



TITLE:

中國近代における機械製綿糸の普及過程

AUTHOR(S):

森, 時彦

CITATION:

森, 時彦. 中國近代における機械製綿糸の普及過程. 東方學報 1989, 61: 489-538

ISSUE DATE:

1989-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/66688>

RIGHT:

中國近代における機械製綿糸の普及過程

森 時 彦

はじめに……………	四八九頁
一 機械製綿糸普及の三段階……………	四九〇頁
二 一八九〇年代の意味……………	四九七頁
三 一九二〇年代の需給關係……………	五一八頁
むすび……………	五三三頁

はじめに

一八九九年、中國の機械製綿糸輸入高は、空前絶後の二七四萬五千擔を記録した。當時で四億人前後とみられる中國の膨大な人口は、一人あたりではいかに微少な消費も、總體としては莫大な消費量にかえてしまった。世界的にもまれなこの輸入量は、その量感にふさわしい影響を、中國の在來綿業にあたえた。

中國經濟の近代化過程は、統計資料の極端な不足から、その計量化をきわめて困難なものにしてきた。綿業の分野でも、この情況にさしてかわりはないが、ひとり機械製綿糸だけは、いちぶ推計をまじえれば、その總供給高と構成をトレースすることも不可能ではない。本稿は、中國近代における機械製綿糸の普及過程を、できうるかぎり計量化につとめながらあつづけ、その視點から中國綿業の近代化過程の一端をかいまみようとするものである。

一 機械製綿糸普及の三段階

一九四〇年といえ、なお日中戦争のさなかではあるが、アヘン戦争以後、とりわけ一八八〇年代半ばにおけるインドの機械製綿糸（當時は「洋紗」とよんだ）の大規模な流入からはじまった中國在來綿業の再編過程が、すでに一つのサイクルをおえていた時期と考えてもよいだろう。

この前後に、揚子江の上流と下流で、前者は中國人の手で、後者は日本人の手で、詳細な農村實態調査がおこなわれていた。第一表は重慶の近郊と思われる巴縣與隆鄉における、農家の戸主の着衣に關する調査である。aの方は、勞働着つまり野良着について、bの方は、晴れ着について、それぞれ素材の割合を示している。さらにそれぞれの表では、山間部と平地部にわけたりえて、大農、中農、小農の階層別についても項目を設けている。細部にわたる分析はともかくとして、ここでは、野良着と晴れ着の相違にだけ注目しておきたい。野良着では、大農層に一〇パーセントをこす「洋布」（機械製綿布）の使用例がみられるものの、やはり「土布」（手織綿布）の割合が壓倒的で、綿布（土布＋洋布）だけの割合でいうと、九〇パーセントをこえることになる。「絲」（絹）と「皮」は問題外として、「草」は蓑笠や草鞋の素材であろう。それが晴れ着になると、大農層ほど洋布の割合がたかく、八〇パーセント前後に達する。中農や小農では、洋布の割合が五〇パーセントちかくまで低下するが、その分わずかながら絹の割合がふえているのは、おもしろい現象である。

この調査で遺憾な點は、土布の素材が區別されていないことである。この當時でもなお、土布の原糸として一部には「土紗」（手紡糸）がねづよくのこっており、「洋紗」（機械製綿糸）をとりいれた土布とは、若干性質を異にしていたので、できれば區別する必要がある（本稿では前者を舊土布、後者を新土布として區別する）。ともあれ、土布は野良着の八〇パーセント以上、晴れ着の三〇パーセントほどの生地として消費され、洋布は野良着の一〇パーセント以下、晴れ着の六〇パーセン

第1表 四川省巴縣興隆鄉における農家戸主の着衣の素材(%)

a. 勞働着

區別	戸數	土布	洋布	絲	皮	草	合計
山村區	大農	20	69.54	9.65	—	20.81	100.00
	中農	21	86.44	4.02	0.92	8.62	100.00
	小農	22	86.29	9.14	—	4.57	100.00
	平均	63	80.63	7.75	0.18	10.44	100.00
平地區	大農	21	80.29	13.94	—	5.77	100.00
	中農	18	87.06	1.08	—	11.86	100.00
	小農	19	89.78	2.69	—	7.53	100.00
	平均	58	85.46	6.39	—	7.74	100.00
兩區平均	大農	41	75.06	11.96	—	12.98	100.00
	中農	39	86.86	2.57	0.28	10.29	100.00
	小農	41	87.97	6.01	—	6.00	100.00
	平均	121	83.83	7.02	0.08	9.07	100.00

b. 晴れ着

區別	戸數	土布	洋布	絲	皮	草	合計
山村區	大農	20	6.89	83.33	2.78	5.56	100.00
	中農	21	37.83	54.05	5.41	—	100.00
	小農	22	32.84	57.14	5.01	—	100.00
	平均	63	21.85	68.84	3.99	2.65	100.00
平地區	大農	21	25.93	74.07	—	—	100.00
	中農	18	40.59	50.63	3.80	5.66	100.00
	小農	19	50.00	48.28	—	1.72	100.00
	平均	58	37.61	58.72	1.38	2.29	100.00
兩區平均	大農	41	17.53	79.92	1.29	2.58	100.00
	中農	39	34.63	51.72	4.31	2.58	100.00
	小農	41	43.00	52.00	2.00	1.00	100.00
	平均	121	33.35	61.70	2.43	2.16	100.00

出典) 賈健「四川巴縣興隆鄉農場大小與農家生活程度調査」—『四川經濟季刊』第2卷第3期(民國34年7月1日)274~275頁。

備考) 合計で100.00%にならない部分がいくつかあるほか、矛盾する個所もみうけられるが、補正のしようがないので原表のままにしておく。

ト以上の生地になっていたというこの數値は、土布が野良着の生地に適し、洋布が金銭的な餘裕があれば晴れ着の生地にのぞましい綿布であったことをものがたっている。ここには提示しなかった別の調査表によれば、全體で戸主一人當り、野良着は上着、四・五着、ズボン、二・六本とおおく、晴れ着は、上着、一・四着、ズボン、〇・五本とすくないという數字があるから、野良着と晴れ着をあわせれば、大雜把なところ土布四に對して洋布一ぐらいの割合で消費されていた計算になる。

四川省巴縣興隆鄉の調査であきらかになつていなかった土布の原料綿糸の區別については、揚子江を二千五百キロほどくだった江蘇省南通縣金沙地區頭總廟での農村調査（交戰地區での軍隊の護衛つきの調査であつた點はわきまえておく必要がある）が、一つの手がかりをのこしている。南通縣といへば、一九二〇年代に營口を窓口とする東北地方への土布供給をほとんど一手にひきうけていた地方である。大生紗廠の提供する機械製綿糸を原糸として手織された南通土布は、新土布の代表的な例といえる。一九三一年の「滿洲」事變以後、日本の侵畧で東北の市場をうしなつた南通土布は急速に衰退するが、一九四〇年頃にもなお、縮少しながらも土布の商品生産がつづけられていたようである。

第二表は、その南通のとある村における農村綿業の狀況をつたえている。全戸數九四戸、人口三九八人のこの村で、織布に従事する家四五戸、紡糸に従事する家四二戸（内、三一戸は紡織兼業）と、それぞれ全戸數の半數ちかくになる。紡糸にだけ従事している家が極貧農層におおいこと、地主層では紡織に従事する家が一户もないことなどは、農村綿業が貧農、極貧農にとつては不可欠の農業外収入の機會であり、紡糸は利益はすくなくとも資金の回轉がはいゆえに、より貧しい階層に適していたといったいくつかの想像を可能にする。

とはいへ、この表でもっとも注目したいのは、原料の項目である。いうまでもなく、繰綿は紡糸の原料である。この繰綿から手紡された土糸と、次の項目の購入綿糸とが、こんどは織布の原料ということになる。繰綿の項目では、貧農層にいくほど購入分がふえ、紡糸を専門にしている農業外の一户では、すべて購入している。原資料の『江蘇省南通縣農村實態調查報告書』によると、紡糸に従事する家のうち、一二戸（紡織兼業一户、紡糸專業一一戸）は、もっぱら販賣用に生産し、自給繰綿

第2表 1939年江蘇省南通縣金沙鎮地區頭總廟における農家紡織狀況

階 層			地 主	小 農	貧 農	極貧農	農業外	合 計	
項 目									
全 戶 數			6	7	31	44	6	94	
紡 織 戶 數	織 戶 數		0	3	4	7	0	14	
	手 紡 戶 數		0	1	3	6	1	11	
	紡 織 兼 業		0	2	16	13	0	31	
	合 計 (A)		0	6	23	26	1	56	
織 機 所 持 數 別 戶 數	1 臺		0	5	21	22	0	48	
	2 臺		0	1	0	0	0	1	
	合計臺數 (B)		0	7	21	22	0	50	
紡 車 所 持 數 別 戶 數	1 臺		0	6	20	22	1	49	
	2 臺		0	1	3	4	0	8	
	3 臺		0	0	1	0	0	1	
	合計臺數 (C)		0	8	29	30	1	68	
原 料	繰 綿	自 給 (D)	斤		38.0	378.0	228.0	0	644.0
			%		(18.8)	(22.9)	(16.4)	(0.0)	(19.5)
		購 入	斤		7.0	46.0	128.0	60.0	241.0
			%		(3.5)	(2.8)	(9.2)	(100.0)	(7.3)
		小 計 (E)	斤		45.0	424.0	356.0	60.0	885.0
			%		22.3	25.7	25.6	100.0	26.8
	購 入 綿 糸	斤		157.2	1,228.5	1,032.3	0	2,418.0	
		%		77.7	74.3	74.4	0.0	73.2	
	合 計 (F)		斤		202.2	1,652.5	1,388.3	60.0	3,303.0
	紡織戶一戶當原料消費 F ÷ A				33.7	71.8	53.4	60.0	57.9
織機一臺當原料消費 F ÷ B				28.9	78.7	63.1	0	66.1	
紡車一臺當原料消費 E ÷ C				5.6	14.6	11.9	60.0	13.0	
全年棉花收量 (G) 斤			365	328	1,159	565	0	2,417	
棉花自家消費率 D ÷ G %			0.0	11.6	32.6	40.4	0.0	26.6	

出典) 井内弘文『滿鐵南通農村實態調査參加報告』東亞研究所 資料丙第227號D 昭和16年9月48頁より作成。

備考) 一部、原資料の(滿鐵)上海事務所調査室編村上捨巳等『江蘇省南通縣農村實態調査報告書』滿鐵調査研究資料第38編 昭和16年3月で補正した。

一〇八斤、購入繰綿の全量二四一斤、計三四九斤からつむいだ同量の土糸を、すべて金沙鎮の「紗莊」（綿糸商）へ持参して、總額三二・五元で賣却したという。したがって、頭總廟で生産された土糸のうち、地元での織布の原糸に直接まわったのは、紡織兼業の三〇戸が、自給繰綿の残り五三六斤からつむいだ同量の土糸にかざられることになる。

購入綿糸二、四一八斤はすべて、織戸が金沙鎮で土布を賣却した折に、その賣上代金の大部分を割いて、紗莊から購入してきたものである。購入綿糸の内譯については記述がないので、推計によるほかない。原資料には、購入綿糸の代金總額、四、七三四元が計上されているほか、この年十月の金沙鎮での物價として、「本紗」（土糸）一市斤、一・二元、「洋紗」一包、十六元が記録されている。一市斤 \parallel 〇・八五斤、一包 \parallel 七・八七五斤で一斤當りに換算すると、土糸は一・四一元、機械製綿糸は二・〇三元になる。兩者の一斤當り價格、購入總量、總額をもとに購入綿糸中の兩者の數量を推計すると、機械製綿糸 \parallel 二、一三七斤、土糸 \parallel 二八一斤という解がえられる。この購入土糸の推計量は、頭總廟の紡糸戸が金沙鎮の紗莊に賣却した土糸の總量三四九斤より、やや少ない數値である。頭總廟における土糸の需給關係は、金沙鎮の紗莊を中核とする市場圈の一部にくみいれられながら、やや出超の傾向にあったという勘定になる。

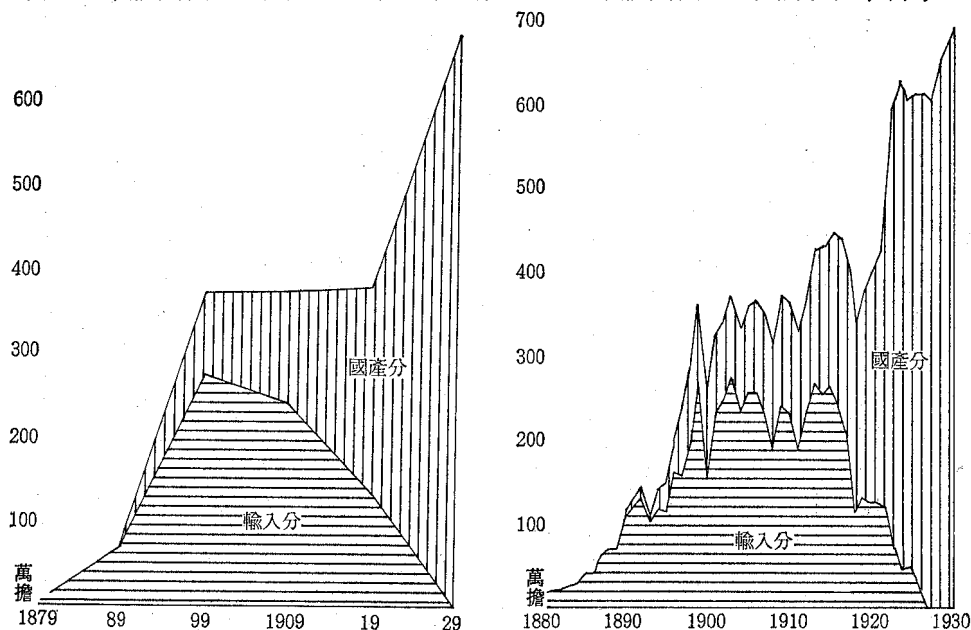
この推計をもとにすれば、頭總廟の織布は、機械製綿糸二、一三七斤、土糸八一七斤、計二、九五四斤を原糸とし、機械製綿糸七二・三パーセント、土糸二七・七パーセントの割合で使用していたことになる。これだけの原糸から、「白小布」三、〇五五四、「白大布」二〇四四、「藍布」一二四四、計三、三八三四が織りあげられたが、自家消費されたのは、わずか一四匹にすぎず、三、三六九匹が總額七、二〇二元で賣却され、商品化率は實に九九・六パーセントに達したという。生産の大部分をしめる白小布は、一匹當り幅〇・八尺、長さ二四尺、重さ一斤ほどの土布で、經糸、緯糸とも十二番手前後の太糸を使用した。當時はすでに、經に機械製綿糸、緯に土糸、あるいは經緯とも機械製綿糸をもちいる新土布が廣く普及していたが、經緯とも土糸の舊土布も消滅したわけではなかった。いまは新土布を機械製綿糸のみの土布に單純化して、原糸の割合を反映するだけの區分にとどめるならば、頭總廟の織布生産には、なお三割ちかくの舊土布が残存していたことになる。¹⁾

一九四〇年前後の時點において、揚子江上流、四川の一農村での事例は、農民の綿布消費の割合が土布四、洋布一で、しかも洋布はおもに晴れ着であったことをつたえ、揚子江下流、江蘇の一農村の事例は、土布生産の原糸の割合が一つの推計では機械製綿糸七、土糸三であったことをものがたっている。この二つの事例は限られた地域でのミクロの情況にすぎないが、中國在來綿業の近代における展開というマクロの問題を考察するうえでも、まったく無意味な一極小部分とは思えない。

これをてがかりに、工業製品が流入する以前の傳統的な農村綿業との比較をこころみれば、機械製綿布の消費が五分の一をしめるにいたったという四川の事例もさることながら、土布の原糸として機械製綿糸が七割以上をしめるにいたったという江蘇の事例の方が、より大きな意味あいをもつのではないだろうか。なぜならば、四川の農民にとって、洋布の流入はおもには晴れ着という非日常的な領域における變化をもたらしたにすぎないのに對し、江蘇の農民にとって、機械製綿糸の普及は、紡糸工程を解消しつつ、在來綿業の生産システム全體に影響をおよぼすことで、日常の生活そのものにかかわる變化をもたらしたであろうと推測されるからである。

一九四〇年前後の二つのミクロの事例を、中國在來綿業再編過程の一つの到達點として念頭におきつつ機械製綿糸の普及過程に考察をすすめていきたい。まず、その普及過程の大難把なイメージをつかむため、中國における機械製綿糸の總供給高をグラフにあらわしてみる。第一圖—aは、インド綿糸の流入が本格化した一八七〇年代末から、中國國內での民族紡の成長と「在華紡」の進出が一段落するまで、換言すれば、中國國內での機械製綿糸の生産が一つのピークに達した一九二〇年代末まで、半世紀にわたって、各十年代の最後の年について、中國市場に供給された機械製綿糸の總量をあらわしている。横線の部分が外國からの輸入分である。一九一〇年代末から二〇年代にかけては、中國からの機械製綿糸の輸出がはじまるので、その分は差しひいてある。したがって正確には、輸入超過分というべきであろう。事實、一九二九年には、輸入分はマイナスに轉じている。縦線の部分は、國産分である。一八九〇年における上海機器織布局（三萬五千錘）の操業開始以後、國産分が計上されることになる。國産分は一九一〇年代までは、その年の操業錘數に一・九擔をかけてわりだした推計値で、二〇年代のみ

第1圖—a 機械製綿糸の總供給高（10年單位） 第1圖—b 機械製綿糸の總供給高（1年單位）



出典）輸入分は Hsiao Liang-lin *China's Foreign Trade Statistics 1864—1949* Harvard University Press, 1974 pp.38~39. 國産分は1919年までは丁昶賢「中國近代機器棉紡工業設備，資本，產量，產值的統計和估量」——『中國近代經濟史研究資料』(6) (1987年4月)の鍾數に1.9擔をかけて算出。1920年以降は趙岡，陳鍾毅『中國棉業史』聯經出版事業公司 民國66年7月刊 295~296頁の推計による。ただし，1922年是不自然な數値であるので，1919年までの方法で補正した。

統計數字を基礎にしている。わざわざ九の年を選んだのは、一八九九年をはじめ焦點となる年が多いからであるが、念のため、各年度の數値をグラフ化した第一圖—bもそえておく。

第一圖—aをよりどころにして、いまかりに中國における機械製綿糸の普及過程に一つの時期區分を設定するとすれば、一八八九年から一八九九年までを第一次急増期、一八九九年から一九一九年までを停滯期、そして一九一九年以降一九二九年までを第二次急増期と區分するのが妥當であらう。第一次急増期は、ほだなく中國綿糸、さらに日本綿糸の參入もみるものの、おもにはインド綿糸がぎりひらいた普及過程である。一八八〇年代においては、着實とはいえ、いまだ緩慢な上昇傾向をしめしていたにすぎない總供給高が、一八九〇年に百萬擔の大臺にのってからは、揚子江流域での激増をてこに急上昇に轉じ、一八九九年には輸入分二七四萬五千擔（内、インド綿糸一九〇萬六千擔、日本綿糸七八萬擔）、國産分九六萬九千擔と、いずれも史上最高を記録し、

當然のことながら總計も三七一萬四千擔と空前のピークをきざんだ。⁽²⁾

それが二十世紀にはいると、總供給高は第一次世界大戦期の微増を除いて二十年ちかくにわたって、四百萬擔のあたりにはりついたまま、ほとんど動きをとめてしまう。一八九九年から一九一九年までを停滯期とした所以である。一八九〇年代において、あれほど急上昇をみせた總供給高が、なぜ二十世紀にはいると、かくも一轉して、しかもかくも長期にわたって停滯することになったのか。これを第一の設問としよう。

二十年間にわたって停滯した總供給高は、一九二〇年代にはいると、いわゆる民族工業の黄金時期に急増した中國紡績業の生産力を背景に、ふたたび急上昇に轉じ、二九年には七百萬擔にちかづき、一〇年代に比べ三百萬擔以上、増加したのである。この第二次急増期には、「在華紡」の進出にともなう民族紡との摩擦といった矛盾をかかえながらも、資本の國籍をとわなければ、中國國內で生産される機械製綿糸は、一九二七年に一〇一パーセントの自給率をマークするにいたった。二十世紀にはいったのち、ながく四百萬擔のあたりで頭うちにあった總供給高が、二〇年代にはいるや、なぜ一舉にふたたび三百萬擔もの激増を達成しえたのか。中國市場のいったいかなる構造的變化が、この爆發的な總供給高の増加を可能にし、またそれを吸収する需要の急増をもたらしたのであろうか。これが第二の設問である。以下の各章をこれら二つの問題の考察にあてる。

二 一八九〇年代の意味

第一次急増期の主役は、インドから流入した機械製綿糸である。すでに小山正明氏の詳細な成果があきらかにしているように、十〜二十番手の太糸にかぎられていたインド綿糸は、在來の農村綿業における土糸（手紡糸）に代替する商品として、中國の農村市場に浸透することに成功した。インド綿糸は、中國の織布にたずさわる農民が長年にわたってなれしたしんできた土糸の長所をあわせもちながら、しかも機械製に特有の撚りのつよさから、糸ぎれしにくい點で經糸として理想的なこと、そ

第3表 漢口から湖南省各地への輸入綿糸再移出高（単位＝擔）

年	地方	長 沙	道 州	岳 州	靖 州	澧 州	常 德	辰 州	永 州	寶 慶	郴 州	衡 州	計
1875		9							87	30		18	144
1876		9							650.2			264	923.2
1877		3		3			3		261			798	1,068
1878		6			12				492	18		846	1,374
1879						3			813	6		762	1,584
1880		9			6				1,734	3		240	1,992
1881		27			16.5		24	3	2,391	54		181	2,696.5
1882		6			3		6		2,511.1	15	6	36	2,583.1
1883		39					12	3	2,722	120	9	507	3,412
1884		105		6	9		114		1,597	159		1,403	3,393
1885		45		6	18		111	9	1,686	312		1,284	3,471
1886		137			21		84		1,149	179		1,128	2,698
1887		33	21			3	83.5		1,190	81	12	1,478	2,901.5
1888		25.5	30	3	3		183	3	1,397	210		1,107	2,961.5
1889		30	54	66	22	3	180	18	2,109	369		1,356	4,207
1890		474	222	183	246	9	390	99	11,332	1,278	462	3,168	17,863
1891		1,672	1,059	138	573	21	738	308	12,239	2,508	807	2,789	22,852
1892		2,716.5	1,098	21	519	708	339	501	12,924	3,721.5	507	1,998	25,053
1893		771	336		84	660	120	777	5,380.5	1,569	30	960	10,687.5
1894		525	369		87	954	69	63	5,052	1,578	6	1,740	10,443
1895		1,689	216	384	141	1,851	267	207	17,002	2,217	54	2,850	26,878

出典) *Returns of Trade 1875—81, Part II*, Hankow. *Returns of Trade and Trade Reports 1882—95, Part II*, Hankow.

備考) 太字は棉作區をあらわす。

してなによりも、棉花とさしてかわりないほどに廉價で紡糸の手間（在來綿業における生産のボトルネック）をはぶけることなどをおもな武器に、まずインド棉花の代替品として華南に、ついで強靱な經糸を要求した華北へ、そして最後に在來綿業の中心部であつた華中へと、概していえば非棉作區から棉作區への順序で浸透していったのである。⁽³⁾

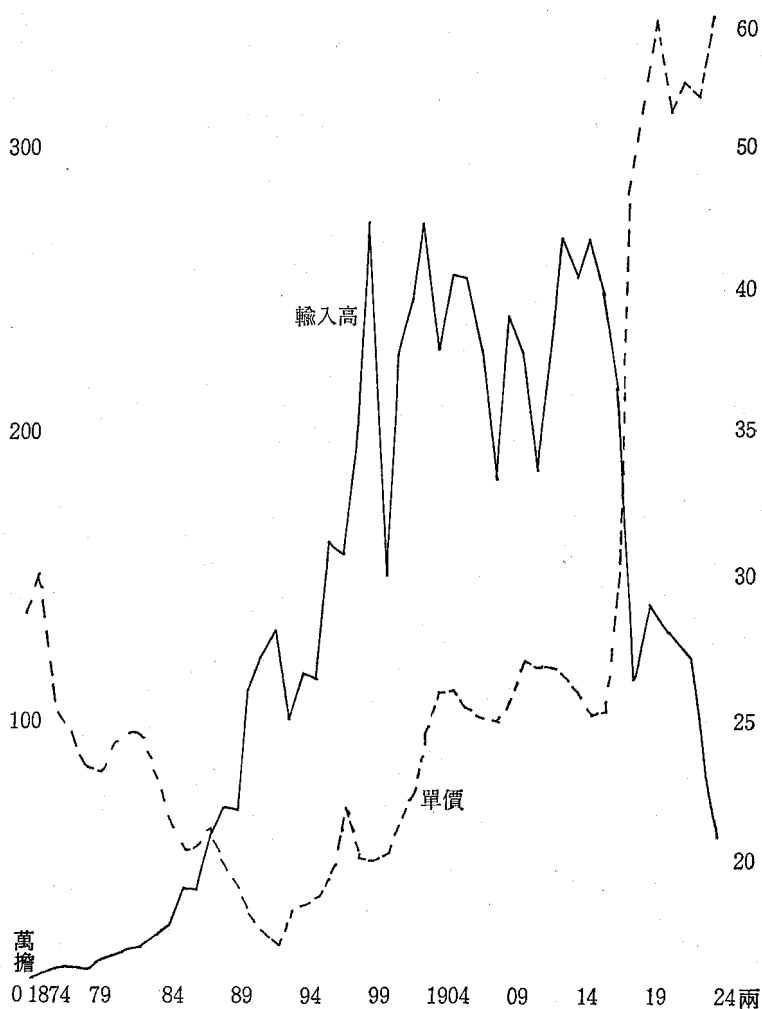
全國的な規模で小山氏があきらかにしたかかる普及の過程は、省レベルの規模でも追認できる。第三表は、輸入綿糸の流入はじめた一八七五年から九五年まで、漢口から再移出された湖南の地方別綿糸輸入高である。湖南唯一の棉作區である洞庭湖周邊の常德、澧州、岳州が容易に輸入綿糸の流入をゆるさなかったのに反し、非棉作區である南部山間地の永州、寶慶、衡州などに輸入綿糸の急速な普及が確認できる。最大の棉産地であつた常德では、一九〇〇年前後でも、年間二〇〇萬兩にもおよぶ綿糸取引額の中、機械製綿糸がしめる割合は四割前後にすぎなかつたといわれている。⁽⁴⁾ 棉作區では、機械製綿糸の普及が非棉作區に比べ、一サイクルおくれるのはたしかなようである。

ともあれ、第一次急増期を、機械製綿糸が在來綿業の土糸にとってかわる過程とみなすことに、さして難點はないであろう。ここでの問題は、その代替化過程が一八九〇年代には非常に急速な進展をみせながら、二十世紀にはいると一轉して頓挫してしまつたのはなぜかということであつた。

この問題に對しては、これまでわずかに嚴中平氏が、おもに輸入綿糸の銀建て價格という視角から外延的な説明をこころみたことがあるにすぎない。それによれば一八七三年から二二年間にわたる世界的な不況期に、資本主義諸國の工業製品は大幅な價格の下落をみた。もっとも中國は外國貿易では銀本位をとっており、この時期にちょうど長期的な銀安傾向がかさなつたため、金本位の歐米資本主義諸國からの輸入品は、金建て價格での下落も銀安で相殺され（一海關兩は一八七三年の六シリング五ペンスから一八九七年の二シリング十一ペンス四分の三まで、半分以上にまで長期的な下落をつづけた）、銀建て價格はさほど下らなかつた。ただインドだけは、一八九九年まで中國と同じ銀本位制をとっていたので、銀安による相殺効果はなく、インド綿糸は大幅な價格の低下を實現しえた。本來的なコストの低さにかててくわえて、このような爲替の恩恵をうけながら、

第2圖 輸入綿糸の單價と輸入高

(單位：輸入高=萬擔，單價=擔當海關兩)



出典) 楊端六等『六十五年來中國國際貿易統計』46頁。

は一七兩弱とほとんど半分にまで下った。この間、輸入高は七五年の九萬擔あまりから一三〇萬擔あまりへと一四倍にふくれあがっている。その逆に、一九一六年からは第一次世界大戰のあおりをうけて、輸入綿糸の擔當り價格は一五年の二五兩弱から二〇年の五九兩あまりへと二倍以上に高騰した。この間、輸入高は一五年の二六八萬六千擔から二〇年の一三三萬五千擔へと半減したのである。これら二つの時期については、輸入綿糸價格と輸入高が完全な反比例の關係にあることが、きわめて鮮

インド綿糸は、中國向輸出の急増をはたしたといふのである。

たしかに、輸入綿糸の擔當り價格(銀建て)と機械製綿糸の輸入高を示した第二圖をみると、嚴中平氏の分析が妥當性をもつ部分もある。輸入綿糸の擔當り價格は、一八七五年の三〇兩あまりから、二度の小さなゆりもどしはあるものの、二十年ちかくにわたって低下しつづけ、一八九二年に

明にみてとれる。

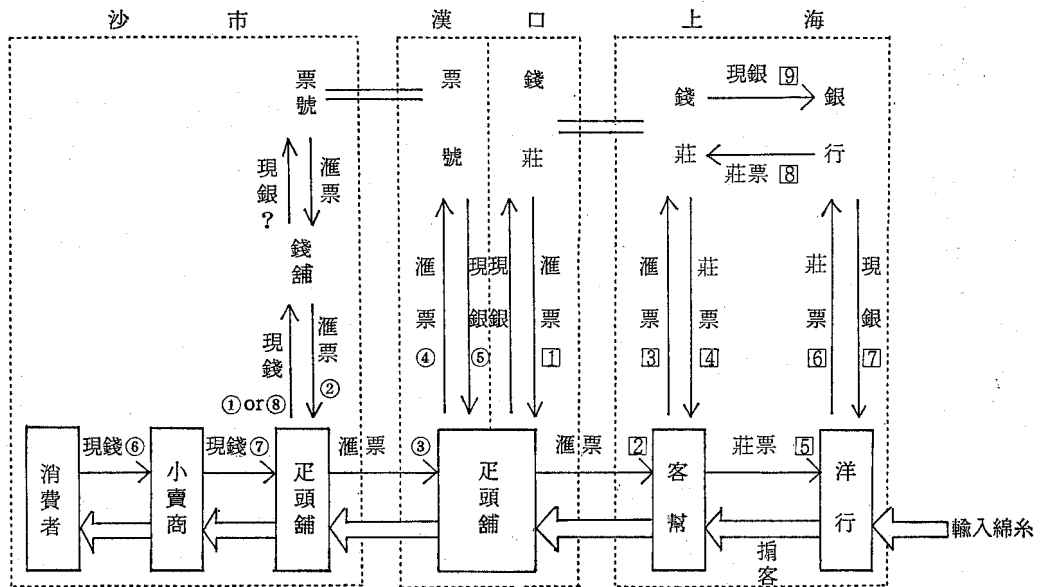
ところが、當面の課題である一八九〇年代における急増と、二十世紀にはいつての停滯という現象を説明するとなると、嚴中平氏の觀點は説得力をもたない。第二圖にもあきらかなように、一八九二年に底をうった輸入綿糸の銀建て価格は反騰に轉じ、一九〇〇年前後にやや反落をみせるものの、一九〇四、〇五年まで續騰し、二六兩弱という一八七五年以來三十年ぶりの高値を記録する。この十五年ちかくにわたる高騰期は、ちょうど輸入高の眞の激増期にかさなる。銀建て價格の推移をよりどころとするかぎり、一八九〇年代の急増は、きわめて不可解な現象にうつる。

なぜほかならぬ一八九〇年代に、輸入綿糸の急増という現象が出來したか、しかもそれが揚子江中、上流域に顯著なのはなぜかといった問題を説明するためには、先學の成果を前提としながら、さらにいまひとつ新たな視點を用意する必要があるように思われる。ここでは、その手がかりとして、輸入綿糸が上海から輸入され最終消費者である奥地の農民の手にわたるまでの、流通経路の問題をとりあげてみよう。なるべく具體的なイメージがえられるよう、最終消費地を湖北省の沙市に設定した一例を示す。沙市は輸入綿糸が流入するまでは四川への土布、棉花を一手に供給する在來綿業の一大集散地であった。

第三圖のように、洋行（外國商社）の手で上海に輸入された外國綿糸は、「掇客」とよばれる仲買人の仲介をへて、「客幫」に賣却される。「客幫」とは地方の「正頭舖」（綿製品卸賣商）が上海に駐在させる出張員で、本店が地元の景氣動向に應じてだす指示にしたがって、外國綿製品の買付をする人物である。上海市場では、この客幫の動向が輸入綿製品の相場を大きく左右するといわれた。かれらの買注文は、たいてい奥地の實需を反映していたからである。

客幫の買付活動は、「行棧」とよばれる商人宿を舞臺におこなわれる。行棧はたんなる宿泊施設ではなく、たとえば四川からきた客幫は、かならず四川人の經營する行棧にあつまってくるというように、つよい同郷意識でむすばれており、買付のための掇客の紹介から、商品船積みのための「報關行」の斡旋まで、上海での取引に金融面をもふくめ、あらゆる便宜をはかつてくれる。こうして買付けられた輸入綿糸は船で漢口におくられる。漢口の正頭舖は、漢口周邊はいうまでもなく、上海と直

第3圖 輸入綿糸の流通経路



出典)『支那經濟全書』第11輯 東亞同文會 明治26年6月4版 505~514, 851~873, 922~924, 976~978頁。「沙市ニ於ケル織物商況」——『通商彙纂』明治39年第34號 7~9頁。鄭亦芳『上海錢莊(1843~1937)——中國傳統金融業的蛻變』中央研究院三民主義研究所叢刊(7) 民國70年10月刊 64~66頁。

備考) □内の數字は、上海から漢口へ仕入れる際の買付資金の流れを示す。③④は不要かもしれない。○内の數字は漢口から沙市へ仕入れる際の買付資金の流れを示す。現銀あるいは現錢は便宜上の表記にすぎない。いわゆる銀票、錢票の場合もあれば當座預金への繰入れあるいは引落しの様な場合もあったであろう。

接の取引ができない地方都市の正頭鋪にこれを卸賣りする。ここでいえば、沙市の正頭鋪が、漢口へ直接、人を派遣するなり、書面をもってなりして、漢口の正頭鋪に買注文をだすことになる。再び船積みされて沙市におくられた輸入綿糸は、さらに正頭鋪から小賣商に卸され、最終消費者である農民の手にわたっていくのである。一九〇七年三月の在沙市日本領事館の報告によれば、沙市の北方十四華里にある草市という鎮は、戸數わずか五、六百戸ばかりの小市街にすぎないが、綿糸業者が二十餘軒もあり、農家機織の原料として、年間六千餘擔の機械製綿糸(日本の船美人がもつとも人氣を博していた)を販賣したという。しかも「綿糸業者ハ何レモ沙市ヨリ轉賣スルモノニテ月末拂ノ現金取引ナリ」とつけくわえている。沙市の正頭鋪から輸入綿糸を仕入れて、草市近邊の農民に供給している小

賣商の様子をつたえるものであろう。

沙市の正頭舗が、上海の洋行と直接取引しないで、漢口の正頭舗に輸入綿糸の買注文をだすのは、沙市と上海の間には直接の商品取引がほとんどないため、爲替をくみにくいのに對して、沙市と漢口の間には商品の往來が頻繁にあって、爲替がくみやすいという事情がある。もちろん、大量の買付をするのでなければ、わざわざ獨自に人を上海へ派遣するのは、採算が合わないという計算もあずかっているであらう。こうして、輸入綿糸は、密接な爲替關係のできあがっている經濟圏の間を、リレ―式に奥地へ奥地へとおくられていたのである。

沙市までの段階の取引では、圖に示したように錢莊や票號のふりだす莊票、滙票などの約束手形や爲替手形が決済にもちいられていたわけであるが、それらの手形はすべて銀兩表示であつた。ところが、沙市の市場圏における取引の決済だけは、いささか様相を異にしていた。

この當時における沙市の綿製品取引の狀況をつたえる日本領事館の報告（一九〇六年四月）には、十三軒の正頭舗と五軒の「廣貨舗」（輸入雜貨卸賣商）が、輸入綿布、綿糸を取扱っており、ほとんどがその商品を漢口から仕入れている旨が記されている。重要なのは、漢口の正頭舗から商品を仕入れるに際しての決済方法である。漢口の正頭舗への支拂いは、四十五日、三ヶ月、一ヶ年という三種の延拂い（もっとも後二者の場合、契約の時に三分の一ないし半分の頭金が必要）がふつうであつたが、いま關係を簡略化するために、即金拂いとして話をすすめる。もちろん即金といっても、沙市から漢口へ現銀を直接、持参していくような、手間と危険のともなう方法とはとらない。沙市と漢口の間の爲替は、おもに山西票號がとりあつてゐた。ところが、山西票號は一般商店との直接取引には應じてくれないので、漢口へ送金の必要ができた沙市の正頭舗は、日頃取引のある錢舗に依頼し、その錢舗からさらに山西票號に銀建ての爲替取組みの依頼がなされる。「滙票」とよばれるこの山西票號ふりだしの爲替手形を以て、沙市の正頭舗は、漢口の正頭舗への綿糸代金にあててゐるわけである。

では、銀建てでふりだされた「滙票」の代金はいかに決済されたのか。錢舗から山西票號への決済については、どの時點で、

どのような貨幣でなされたのかを詳らかにしないが、正頭舗から錢舗への決済に關しては、領事館の報告者は、一種驚嘆の念をこめて詳述している。「此爲替資金コソ實ニ何等一ノ抵當物アルコトナク唯ダ一言ノ口約ニ依リテ甘諾セラレ毫モ遲疑スル所ナキニ至リテハ驚クノ外ナシ」。つまり日頃から取引關係のある錢舗であれば、いわば一種の信用貸付のかたちで、銀兩表示の「滙票」を融通してくれるのである。沙市における正頭舗から錢舗への爲替代金支拂いに、あえて番號を付するなら、錢舗が信用貸付に應じない場合は①となり、應じた場合は⑧ということになる。

しかし、なにもまして注目すべきは、「滙票」代金の返済にもちいられた貨幣の種類である。報告者は「唯ダ茲ニ返納金額ニ對シテハ所謂當地ノ通貨タル銅錢ヲ以テセシム」と、短かくはあるが重要な記述をのこしている。銀兩表示でふりだされた「滙票」の代金が、銀兩ではなく、銅錢で決済されていたというこの事實は、當面の疑問をときほぐすうえで、またとない一つのヒントを提供している。

從來の研究では、外國製品の中國への輸入動向を分析するにあたっては、おもに外國爲替のレート、わけても金銀レートに多大の注意をはらう傾向があった。いわば、外國と中國の接點にのみ關心をかたむけてきたわけである。たしかに對象が歐米資本主義國の工業製品で、中國國內でも決済が銀だけで完了する市場圏で消費される商品であれば、金銀比價は輸入動向を大きく規定したであろう。しかし、ここで對象にしているインド綿糸は、一八九九年までは銀本位制であったインドの工業製品であるばかりでなく、その最終消費者は、おしなべて銅錢の經濟圏にある農村に住む農民だったのである。むろん、機械製綿糸として、中國國內の景氣を反映している輸入動向全體と無關係であるはずはないが、すでに沙市の例でくわしくみたように、地方市場の正頭舗が「滙票」代金返済の段階から、銅錢によって決済しているケースもあったという事實を考慮にいれるならば、金銀比價もゆるがせにはできないものの、より細心の注意が、銀錢比價にむけられてしかるべきであろう。

そこで、問題の一八九〇年代を中心に、清末民初における銀錢比價の動向をさぐってみよう。第四表は、*Decennial Reports* 所載の海關兩と制錢のレートをはじめとして、筆者の眼にした揚子江流域の各地における銀錢比價の一覽表である。

二十世紀にはいると、制錢の代用に廣東省ではじまった銅元の鑄造が各省に廣がった結果、銀元と銅元の比價がむしろ一般的になる。嚴密には本來的な意味の銀錢比價と區別する必要があるが、ここでは便宜上、一括して扱う。

地方によって、ややまちまちの感はあるとはいへ、一八七〇年代半ばからはじまった錢高傾向は、一八八〇年代初期と一八九〇年代初期に、二度のかい反落をみせるものの、一九〇三年ないし〇四年のピークまで、ほぼ三十年間にわたって繼續する。たとえば、上海における一海關兩との比價は、一八七二年の一、八七五文から一九〇四年の一、二二五文まで、六五〇文、率にして約三五パーセント高騰したのである。そのおもな原因は、世界的規模での銅地金の高騰と制錢の鑄造停止にあったといわれている。⁸⁾

この全般的な傾向とはべつに、各地方のレートを仔細にみくらべてみると、一見、無秩序の印象をあたえる。たとえば、漢口では一海關兩との比價が、一八九八年の一、三六二文から九九年の一、三八七文へと二五文下落しているのに反し、太い交易のパイプでむすばれていたはずの沙市では逆に、九八年の一、三七〇文が九九年の一、二七四文へ九六文も高騰していると、いった具合である。沙市では、一八九八年におこった沙市教案のもたらした恐慌状態からようやく回復しつつあった時期に、棉花、生絲の買付時期がかさなったため、買付資金の制錢が不足し、九九年には漢口での下落をよそに、ひとり高騰した次第のようである。そこで、買付時期の舊曆七月に急遽、三十萬串以上の制錢が漢口より買入れられた。⁹⁾ その結果、翌一九〇〇年には漢口一、三三三文、沙市一、三一六文と、ほぼ平衡状態にもどったのである。

この一事を以て全體を判斷するのは危険であるが、揚子江流域では、漢口と沙市の間にみられたように、いずれかの地方で錢が異常に高騰すると、となりの經濟圏から、一定の平衡状態（兩地間のレート差が移送コスト以下になる點）に達するまで、錢が流れこんできたのではないだろうか。このような各經濟圏の間の平衡作用が連鎖することによって、揚子江流域各地の銀錢比價は、長い眼でみると、けっきょくは、ほぼ同一の歩調で、騰落をくりかえしていたように思われる。いまは、嚴密な實證の手續きをふむ餘裕はないので、第四圖でその一端を示すにとどめる。揚子江下流の南通と揚子江中流の沙市は、同じ揚子

種別 年	銀 兩							銀 元				
	海 關 兩						上海兩	庫 平 兩		南通	漢口	上海
	上海	鎮江	蕪湖	漢口	沙市	重慶		江 蘇	江西			
1905					1,420			1,419	1,627	914	1,070	1,070
06					1,620			1,505	1,723	1,080	1,100	1,100
07					1,620			1,536	1,739	1,081	1,160	1,160
08					1,790			1,609		1,213	1,230	1,230
09					1,950					1,317	1,270	1,270
10					1,935					1,338	1,310	1,310
11					1,900					1,295	1,340	1,340
12					1,890					1,313	1,230	1,230
13					2,060					1,291	1,300	1,300
14					2,010					1,317	1,390	1,390
15					2,080					1,397	1,360	1,360
16					2,250			銀 元		1,381	1,380	1,270
17					2,350			長 沙 重慶		1,283	1,400	1,290
18					2,400					1,289	1,470	1,329
19					2,440			1,545		1,313	1,500	1,360
20					2,500	宜昌		1,631		1,354	1,640	1,415
21					2,760			1,724		1,468	1,740	1,546
22					2,960			2,005	2,300	1,654	1,940	1,747
23					3,140			2,178	3,000		2,150	1,816
24					3,750			2,509	3,300		2,450	2,064
25					4,430			3,206	4,800		3,090	
26					5,650			3,387	6,700		3,450	
27					6,300			3,423	8,800		4,000	
28					6,350			3,765	8,800		3,990	
29					7,125			4,770	11,400		4,410	
30					8,025			5,492	15,000		5,250	
31					9,275			6,152	15,000		5,490	
32								6,700			6,100	
33											6,120	
34											6,400	
35											6,000	
36											6,000	

備考) 1 銀兩は銅錢との比價，銀元は銅元との比價。單位は文に一律化した。庫平兩は上半年と下半年の中間値。銀元の漢口と上海は年末値。

2 1920年代の重慶における銅元の下落は異常であるが，これは「當五百」の悪質な銅元が鑄造されたため，揚子江中流の宜昌などもその流入で錢安が加速したという。

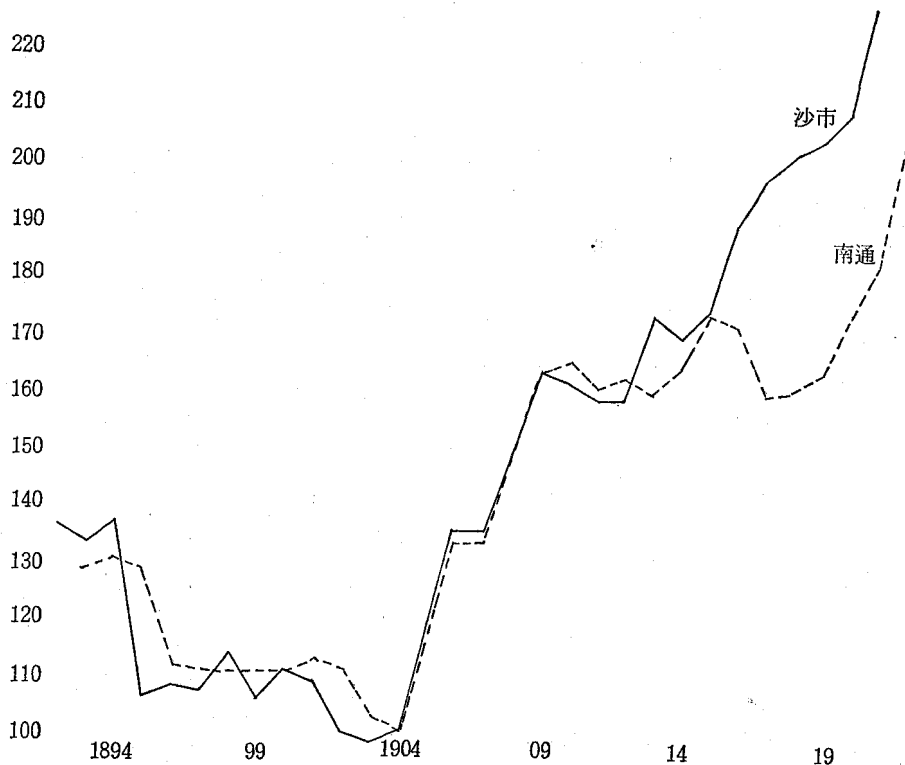
3 本表には揚子江流域だけをとりあげたが，ほかの地區の例を1892年と99年の分だけ紹介すると（ともに1海關兩當り文），天津1,632→1,200，芝罘1,617→1,235，寧波1,520→1,437，廈門1,537→1,484，汕頭1,534→1,344，廣州1,560→1,420。概していえば，華北は揚子江流域と同じ程度の錢高が進行したのに，華南は汕頭を除き，若干の錢高にとどまっている。1890年代における輸入綿糸の増加の地域的傾向（揚子江流域激増，華北漸増，華南停滞）と對照すると，興味深い現象である。

第4表 揚子江流域各地の銀錢比價對照（單位=文）

種別 年	銀						兩			銀 元		
	海 關 兩						上海兩	庫 平 兩		南通	漢口	上海
	上海	鎮江	蕪湖	漢口	沙市	重慶		江 蘇	江西			
1870	1,875						1,683					
71	1,875						1,683					
72	1,875						1,683					
73	1,808						1,616					
74	1,805						1,620	1,775				
75	1,778						1,598	1,795				
76	1,722						1,545	1,761				
77	1,655						1,485	1,719				
78	1,598						1,434	1,625.5				
79	1,620						1,454	1,617				
80	1,653						1,483	1,660	1,700			
81	1,690						1,517	1,687	1,680			
82	1,685		1,722	1,689			1,513	1,660.5	1,642			
83	1,685		1,733	1,721			1,513	1,707.5	1,678			
84	1,651		1,702	1,724			1,482	1,689.5	1,716			
85	1,650		1,733	1,724			1,481	1,701.5	1,718			
86	1,648		1,722	1,650			1,479	1,654.5	1,626			
87	1,557		1,619	1,644			1,397	1,576.5	1,605			
88	1,580		1,650	1,626			1,418	1,583.5	1,606			
89	1,585		1,634	1,610			1,423	1,556.5	1,555			
90	1,488		1,587	1,562			1,336	1,540	1,533			
91	1,496		1,593	1,560			1,343	1,524.5	1,541			
92	1,552	1,648	1,522	1,573	1,630	1,704	1,393	1,544	1,580			
93	1,552	1,565	1,577	1,527	1,600	1,690	1,393	1,598	1,543	1,033		
94	1,508	1,540	1,567	1,605	1,645	1,613	1,354	1,540	1,555	1,050		
95	1,465	1,500	1,520	1,500	1,274	1,510	1,315	1,500	1,500	1,030		
96	1,378	1,419	1,364	1,331	1,292	1,342	1,236	1,483	1,355	911		
97	1,378	1,378	1,395	1,299	1,288	1,263	1,236	1,331.5	1,354	903		
98	1,305	1,370	1,351	1,362	1,370	1,342	1,171	1,343	1,355	900		
99	1,325	1,389	1,385	1,387	1,274	1,326	1,189	1,363	1,425	900		
1900	1,328	1,376	1,351	1,370	1,333	1,316	1,192	1,362	1,429	901		
01	1,305	1,405	1,437	1,326	1,312	1,277	1,212	1,367	1,419	914		
02	1,345				1,200		1,207	1,354.5	1,389	900	800	800
03	1,278				1,170		1,147	1,317.5	1,333	830	840	840
04	1,225				1,200		1,100	1,334.5	1,370	810	900	900

出典）海關兩の上海と上海兩および銀元の上海は張家驥『中華幣制史』民國大學叢書之一 民國大學出版部 民國15年刊（いまは鼎文書局民國62年覆刻版による）第五編33～36頁。庫平兩はともに羅玉東『中國釐金史』中央研究院社會科學研究所叢刊第六種 商務印書館 民國25年（いまは大東圖書公司1977年覆刻版による）508, 541頁。海關兩の上海以外と銀元の重慶は*Decennial Reports* 1882—91, 1892—1901, 1902—11, 1912—21. 銀元の南通は林學百『近代南通土布史』159—160頁。銀元の漢口は『湖北省年鑑』第一回 湖北省政府秘書處統計室 民國26年刊 416—417頁。銀元の長沙は、胡適『湖南之金融』湖南經濟調查所叢刊 民國23年刊 附錄68—84頁。

第4圖 沙市と南通の銀錢比價指數 (1904年=100)



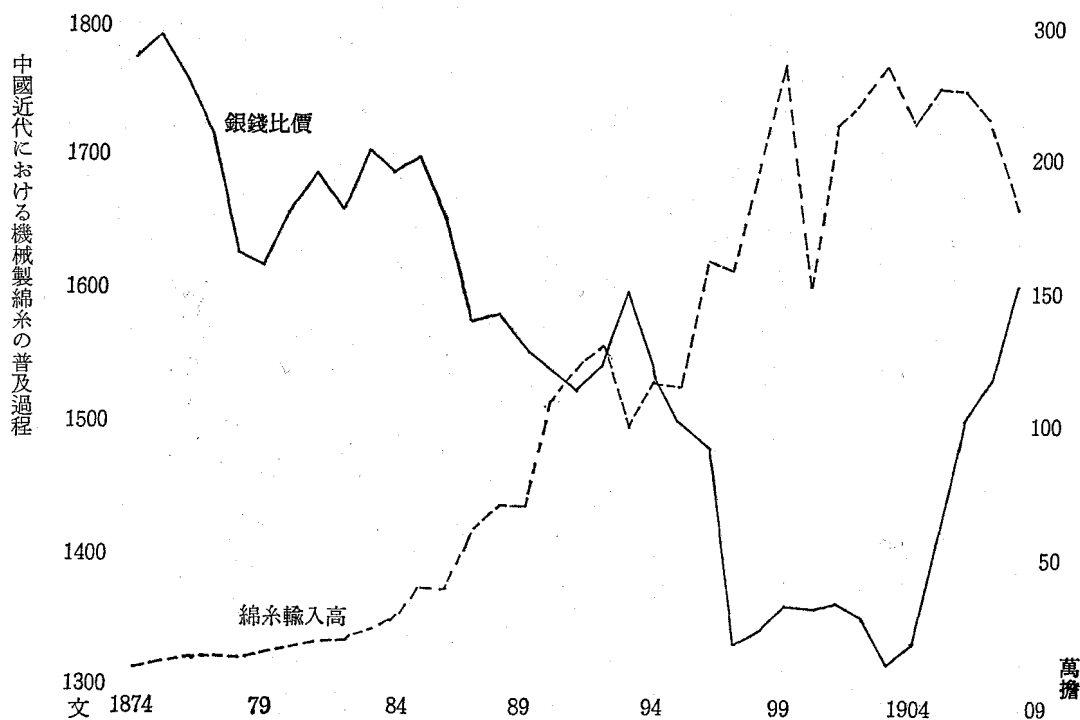
出典) 沙市は *Decennial Reports 1892-1901, 1902-11, 1912-21* Sha-si.

南通は林學百『近代南通土布史』159~160頁。

江流域とはいっても、千五百キロ以上もへだたっているうえに、おそらく南通は上海、沙市は漢口との間にのみ、銀錢の往來があるだけで、南通と沙市の間に直接の銀錢往來があったとは思えない。この隔絶した二つの地方における銀錢比價の指數を比較したのが第四圖である。一概に銀錢比價とはいっても、沙市の場合は一海關兩と制錢の比價、南通の場合は一銀元と銅元の比價とそれぞれ異なるにもかかわらず、一九〇四年を一〇〇とする指數にしてみると、その騰落の傾向は、おどろくばかりに接近している。南通と比べ、沙市の指數は、一八九五年のマイナス二十二ポイント、一九〇二年のマイナス十一ポイント、一九一三年のプラス十三ポイントなど、大きく乖離する年が三度あるが、いずれも一八九六年マイナス四ポイント、一九〇三年マイナス五ポイント、一九一四年プラス五ポイントと、翌年にはほぼ平衡状態の許容範囲内にすばやくもどっている。もっとも一九一五年以降になると、一六年プラス十八ポイント、一七年プラス三十八ポイント、一八年プラス

第5圖 江蘇の銀錢比價と中國の綿糸輸入高

(單位：比價=庫平銀一兩當文，輸入高=萬擔)



出典) 比價は羅玉東『中國釐金史』508頁。輸入高は楊端六等『六十五年來中國國際貿易統計』46頁。

四十一ポイント、と乖離はひろがるばかりで、平衡作用は機能しなくなる(第四表の銀元の部分でもその傾向はうかがえる)。

ともあれ、一九一五年以前においては、揚子江流域各地の銀錢比價は、短期的にはまちまちの感をともないながらも、長期的にみれば、ほぼ同じような騰落傾向をたどっていたことは、推測できるだろう。このような前提のもとに、いま揚子江流域の銀錢比價を代表するものとして、江蘇省における銀錢比價をとりあげ、機械製綿糸の輸入高との相關關係をさぐってみたい。第五圖は、江蘇における一庫平兩が何文に當るかを實線で、綿糸輸入高を點線で示している。銀錢比價の方は、一八八〇年から八五年にかけてかなり大きな反落と、一八九二年から九三年にかけて一時的な反落と、二度の中休みはあるものの、一八七五年から九七年まで、二十年以上にわたって錢價の高騰傾向がつづいた。とくに一八九三年から九七年にかけては、わずか四年の間に一、五九八文から一、三三一・五文へと二六六・五文、率で一七

パーセントも急騰している。一八九七年から一九〇三年ないし〇四年までは、すり鉢状の高原をかたちづくったのち、一轉して急落にかわり、一九〇三年の一、三一七・五文から一九〇八年の一、六〇九文まで、これまたわずか五年の間に、二九一・五文、率で二二パーセントも急落してしまった。そのおもな原因は、異常に高騰した錢價をおさえるために、湖北省などでさかんに鑄造されるようになった銅元が、一九〇四年以降濫發による供給過多になったところにあるといわれる。⁽¹⁰⁾一八八五年から一九〇八年までの二四年にわたるこの激しい銀錢比價の變動を、綿糸輸入高の動向とかさねあわせてみれば、どうであろう。一八九三年の相當の落ちこみを除いては、綿糸輸入高は、一八八五年の三八万八千擔から一八九九年の二七四萬五千擔まで七倍以上に急増している。一九〇〇年には、一四八萬八千擔と前年のほぼ半分まで激減するが、これは義和團の影響によるもので、しかるべく補訂して觀察すべきであろう。この一九〇〇年を除外すれば、綿糸輸入高も、一八九九年から一九〇五、六年まで高原状態をたもったのち、反落に轉じた。

以上のような銀錢比價と綿糸輸入高の相關關係からは、一八九〇年代に急激に加速した錢高傾向が、錢の購買力を大幅にたかめ、ひいては輸入綿糸の錢建て價格、すなわち消費者價格を大幅にひき下げたことから、中國農村における輸入綿糸に對する需要が急速にほりおこされ、綿糸輸入高をわずか十數年で七倍以上にも急増させる現象をもたらした経緯、また逆に、一九〇四年以降の急激な錢安傾向が、正反對の因果關係をたどって、外國製品に對する保護關稅のような役割をはたした結果、綿糸輸入高の急激な増加を頓挫させ、さらにはかなりの減少さえもたらした経緯をみてとることができる。

このような全般的な趨勢にかててくわえて、さきにみたような沙市の疋頭舖の輸入綿糸仕入れ方法をも視野の中にいれるならば、たんに最終消費者である農民ばかりではなく、地方市場における輸入綿糸の流通にたずさわっていた業者もまた、銀兩表示の「滙票」代金返済の段階で錢高による利益と錢安による損失をふたつながら、こうむる立場にあつたわけ⁽¹¹⁾で、錢高傾向の時には漢口への買注文を積極的⁽¹²⁾にだすことで、また錢安傾向の時には買注文に消極的になることで、綿糸輸入高増減の重要なファクターになっていたことがわかる。さきの沙市の領事館報告が、疋頭舖の「滙票」とりくみについて、「當地ノ金融市

場ニ多大ノ關係ヲ有スルト共ニ延テ正頭舖ガ事業ノ消長ニ亦大ナル關係ヲ及ボスモノナレバ最モ思慮ヲ要シ且ツ慎重ノ態度ニ出デサル可カラズトナス⁽¹²⁾と述べているのは、このあたりの事情を念頭においてのことであろう。

銀錢比價の變動が、末端消費者の消費動向にあらわれるまでには、若干のタイムラグをとまうことも十分に考えられるが、それが流通業者の輸入綿糸の仕入れ意欲をも左右していったとなると、ほとんど時をおかずして反應があらわれたとしても、なんの不思議もない。銀錢比價の變動と、綿糸輸入高の増減が、あれほど明確な相關關係をみせた背景には、地方市場における流通業者の、錢高、錢安に對するすばやい對應を想定せざるをえない。

日清戰爭以降、中國市場への本格的な進出を開始した日本は、當然、時を同じくして進行していたこの激しい銀錢比價の動向に關心を示した。一八九七年五月の在重慶日本領事館の報告は、「兩三年前ヨリ銅錢ハ騰貴ノ一方ニ傾キテ」と急激な錢高傾向を指摘したのち、「原因ハ要スルニ供給不足ニ歸因ス可シ⁽¹³⁾」として、銅地金の世界的な高騰により、制錢を鑄つゞして銅地金にする方が制錢の額面より高價に取引できる現状を事こまかにつたえている。その前年、一八九六年六月における在沙市日本領事館の報告も、「銅錢缺乏ヲ告ゲ錢價日ニ昂ル⁽¹⁴⁾」と、制錢の減少からくる錢高現象を指摘している。しかしながら、一八九〇年代後半、錢高傾向が急速に進行している段階においては、錢高の現象とその原因を指摘する報告はままみうけられるものの、錢高傾向と輸入動向とをむすびつけて論じている報告は管見ではほとんどない。

そのような觀點から銀錢比價の問題が論じられるようになるのは、一九〇四年以降の急速な錢安の段階になってからである。一九〇九年二月の在漢口日本領事館の報告には、「清國内地及下層社會は一般に流通貨幣として最も多く銅錢を使用する」ところから、「弗銀（或は兩銀）に對する銅錢の下落は日用品の騰貴を來し購買力の減少⁽¹⁵⁾」をもたらす關係があきらかにされたのち、とりわけ外國からの輸入品は、銀安との相乗作用により「其の販路に困むの狀況に沈淪せり⁽¹⁵⁾」との的確な指摘がなされている。また、一九〇七年七月の在長沙日本領事館の報告は、湖南の外國綿糸輸入額が「數年前ノ輸入額ニ比較スレバ約三割内外ノ減少ヲ來セリ」と述べ、その第一の原因を、輸入綿糸の消費者が「土布織造ノ原料ニ使用」する「田舍人」で、一括

第5表 輸入綿糸、輸出棉花の錢建て價格と新土布、舊土布の價格推計

項目 年	銀錢比價 海關兩	輸入綿糸價格と新土布價格					輸出棉花價格と舊土布價格			
		擔當 海關兩	斤當り文	指 數	新土布(1尺當り)		擔當 海關兩	斤當り文	指 數	舊土布 (1尺 當り)
					16 文	18 文				
1874	1,805	28.62	516.6	196	31.4	35.3	9.00	162.5	94	23.5
75	1,778	30.05	534.3	203	32.5	36.5	10.20	181.4	105	26.3
76	1,722	25.14	432.9	164	26.2	29.5	9.16	157.7	92	23.0
77	1,655	24.46	404.8	154	24.6	27.7	9.93	164.3	95	23.8
78	1,598	23.26	371.7	141	22.6	25.4	10.16	162.4	94	23.5
79	1,620	23.14	374.9	142	22.7	25.6	9.97	161.5	94	23.5
80	1,653	24.08	398.0	151	24.2	27.2	9.96	164.6	96	24.0
81	1,690	24.51	414.2	157	25.1	28.3	9.96	168.3	98	24.5
82	1,685	24.36	410.5	156	25.0	28.1	9.70	163.4	95	23.8
83	1,685	22.99	387.4	147	23.5	26.5	10.92	184.0	107	26.8
84	1,651	21.36	352.7	134	21.4	24.1	11.47	189.4	110	27.5
85	1,650	20.30	335.0	127	20.3	22.9	11.60	191.4	111	27.8
86	1,648	20.41	336.4	128	20.5	23.0	11.00	181.3	105	26.3
87	1,557	21.16	329.5	125	20.0	22.5	9.79	152.4	88	22.0
88	1,580	19.65	310.5	118	18.9	21.2	11.00	173.8	101	25.3
89	1,585	19.10	302.7	115	18.4	20.7	10.00	158.5	92	23.0
90	1,488	17.85	265.6	101	16.2	18.2	10.00	148.8	86	21.5
91	1,496	17.26	258.2	98	15.7	17.6	10.80	161.6	94	23.5
92	1,552	16.92	262.6	100	16.0	18.0	10.00	155.2	90	22.5
93	1,552	18.12	281.2	107	17.1	19.3	10.70	166.1	96	24.0
94	1,508	18.37	277.0	105	16.8	18.9	9.85	148.5	86	21.5
95	1,465	18.64	273.1	104	16.6	18.7	12.50	183.1	103	23.5
96	1,378	19.64	270.6	103	16.5	18.5	12.00	165.4	93	24.0
97	1,378	21.82	300.7	114	18.2	20.5	14.99	206.6	120	30.0
98	1,305	19.94	260.2	99	15.8	17.8	11.51	150.2	87	21.8
99	1,325	19.89	263.5	100	16.0	18.0	13.00	172.25	100	25.0
1900	1,328	20.14	267.5	102	16.3	18.4	13.85	183.9	107	23.8
01	1,305	21.42	279.5	106	17.0	19.1	16.18	211.1	123	30.8
02	1,345	22.17	298.2	113	18.1	20.3	16.99	228.5	133	33.3
03	1,278	24.43	312.2	118	18.9	21.2	17.50	223.7	130	32.5
04	1,225	25.82	316.3	120	19.2	21.6	20.20	247.5	144	36.0

出典) 銀錢比價は張家驥『中華幣制史』第五編33頁。輸入綿糸擔當り價格と輸出棉花擔當り價格は楊端六等『六十五年來中國國際貿易統計』36, 46頁より算出。

備考) 海關統計の價格記載は、1904年にそれまでの市場價格から、輸入品はC. I. F. 價格、輸出品はB. O. F. 價格に變更された。したがって、1904年の價格を03年以前と整合的に比較しようとするれば、輸入品市場價格=C. I. F. +14.5%, 輸出品市場價格=B. O. F. -10.5%で、市場價格に修正する必要がある。修正の結果は、輸入綿糸、擔當り29.56海關兩、斤當り362.1文、指數137で、新土布尺當り21.9~24.7文、輸出棉花、擔當り18.01海關兩、斤當り220.6文、指數128で、舊土布尺當り32.0文となり、新、舊土布の價格差は、7.3~10.1文にちぢまる。

（八斤か？）何串何文という銅錢で購入するため、「錢價暴落」が消費の減退をもたらした點にもとめている。⁽¹⁶⁾さらにさきにも引用した一九〇六年四月の在沙市日本領事館報告は、「現ニ昨年ノ如キ銅錢ノ殆ント無制限ニ鑄發セラレタル結果錢價ノ暴落底止スル所ヲ知ラサリシヨリ之ヲ豫期セザリシ商賈等ハ忽チ一大打擊ヲ蒙リ何レモ鈔ナカラサル損失ヲ招キタルガ如キハ事實ノ最モ顯著ナルモノナリキ」と述べている。一九〇四年までは錢高の恩恵をこうむっていた沙市の疋頭舖が、翌年からは一轉、錢安の損失に呻吟している様が伝えられている。日本側の觀察も、中國向輸出が順調にのびている段階では、あえてその原因をせん索しようとはしなかったのに反し、輸出減退が明白になった段階ではじめて、その原因を銀錢比價の變動と関連させる視點を獲得したわけである。

さて、輸入綿糸の錢建て價格の一例を上海について求めてみると、第五表のようになる。一八七五年に一斤當り五三四・三文であつた輸入綿糸の錢建て價格は、一八九二年までは、銀建て價格の低下と錢高が相乗効果を發揮して、一八八〇、一年の反騰を例外に、低下の一途をたどり、九一年には二五八・二文という最安値を記録している。九三年からは銀建て價格の急激な反騰がはじまり、擔當り一八九二年の一六・九二兩から一九〇四年の二五・八二兩まで八・九兩、五三パーセント上昇した。しかし、この間はちょうど急激な錢高傾向の時期にかさなつたため、錢建て價格では、銀建て價格の急騰も錢高による相殺でかなり緩和され、一八九七年の三〇〇・七文を例外に、ほぼ二六〇～二七〇文のあたりにおさえられていた。さすがに、一九〇三、四年になると、錢高のピークにもかかわらず、銀建て價格のあまりの高騰に錢建て價格も三〇〇文の壁を突破してしまう。その後については、いまのところ一貫した數字は提示しえないが、長期的な錢安傾向への一變で、輸入綿糸の錢建て價格はさらに上昇の一途をたどつたことが豫想される。

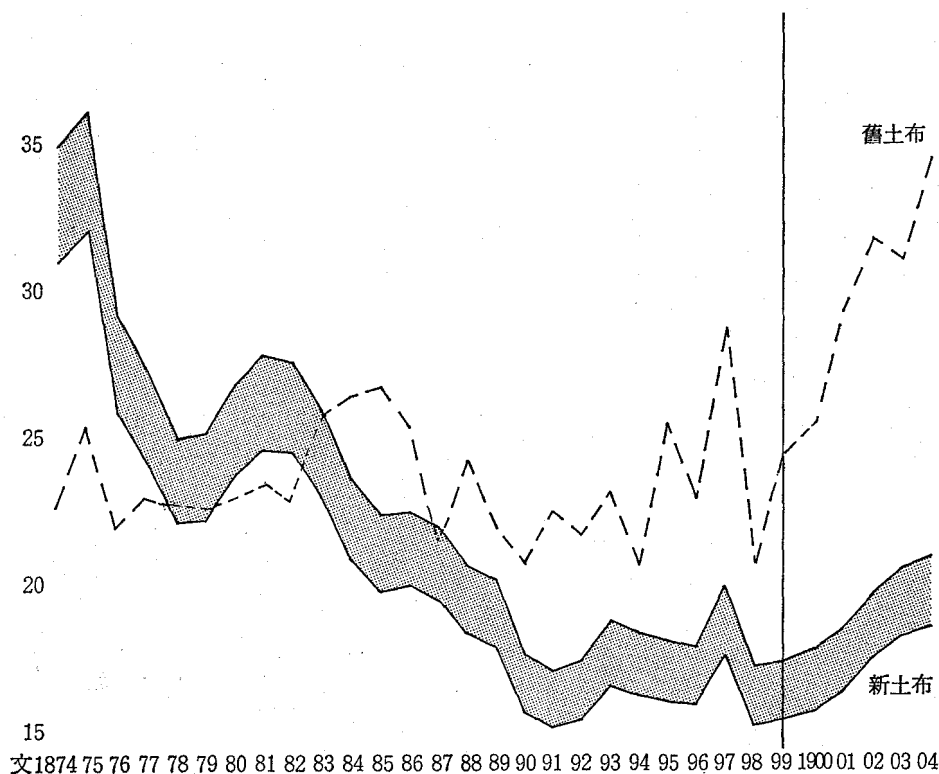
土糸の價格との關係でいえば、沙市で採集された實勢價格は、一八九九年三月に、土糸一擔當り三八串三五〇文に對し、日本の機械製綿糸十六番手は一捆（三三〇斤）當り七五兩であつた。⁽¹⁷⁾この月の沙市での銀錢比價、一兩Ⅱ一、二八七文で一斤當りに換算すると、土糸の三八三・五文に對し、日本綿糸は三〇一・六文で二割以上も割安という數値がでる。一八九九年の上

海での錢建て價格二六三・五文とくらべると、三八・一文、率で一四・五パーセントほど割高であるが、上海から沙市までの流通經費と、沙市の例が十六番手で當時の輸入綿糸の中では比較的高價なものであった點をあわせ考えると、さほどかけはなれた數値とはいえない。いまかりに、沙市での輸入綿糸の錢建て價格は、上海での錢建て價格の一四・五パーセントまして、土糸の錢建て價格は不變であつたと假定すれば、沙市での輸入綿糸錢建て價格が、三八三・五文を下回るのは、一八八七年の三七七・三文(三二九・五×一・一四五)で、一八八五、八六年はほぼ同額であつたことになる。こうして一八八〇年代半ば頃に、土糸よりも安價になつたと推計される機械製綿糸の錢建て價格は、その後の急速な錢高傾向の進行につれて低下の一途をたどり、一八九〇年代には、土糸よりも二割以上も安價になつたのである。

しかし、沙市でいうと、一九〇四年からは一轉、急激な錢安傾向にかわり、一海關兩當り一九〇三年の一、一七〇文から一九〇九年の一、九五〇文まで、わずか六年で六七パーセントも錢が下落する。この大幅な錢安で、機械製綿糸と土糸の價格差は、急速に解消ないし再逆轉した。例えば、沙市と四川の貿易の中繼港にあたる宜昌では、早くも一九〇六年九月の段階で、土糸の錢安による銀建て價格下落の結果、「土紡糸ハ毎斤紡績糸ヨリ十仙方安値」となつたことが報告されている。その後については一九三〇年代の河北省定縣で、土糸の方が一斤當り四十七仙割安との報告がえられるまで、管見では兩者の實勢價格を示す例を知らないが、中國農村市場での輸入綿糸は、一九三〇年代まで續く長期的かつ急激な錢安傾向のうえに、第一次世界大戰期における世界的な規模での綿糸相場の投機的暴騰もくわつて、一八九〇年代から一九〇三、四年にかけてのような、價格面での壓倒的な優位性は、ついに回復できなかったものと推測される⁽¹⁹⁾。

それでは、土糸で織られた土布(舊土布)と輸入綿糸で織られた土布(新土布)の錢建て價格はどういう關係にあつたのだろうか。舊土布と新土布の錢建て價格が判明しているのは、いまのところ一例だけである。沙市の例とくしくも同じ年、一八九九年の重慶海關報告によれば、沙市からきた荊州土布(舊土布)が一尺當り二十五文であるのに對し、インド綿糸で織つた土布(新土布)は、一尺當り十六文から十八文であつたといふ⁽²⁰⁾。新土布の方が三割前後もやすかつたわけである。第五表はこ

第6圖 新土布と舊土布の價格比較（單位＝1尺當り文）



出典) 第5表

の數字を基準數にとり、舊土布の錢建て價格は中國からの輸出棉花の錢建て價格指數と連動し、新土布の錢建て價格は輸入綿糸の錢建て價格指數と連動するという假定のもとに、一八七四年から一九〇四年までの、新、舊土布の價格推計をこころみたものである。基準數以外はすべて全國平均あるいは上海での數値で、嚴密な比較は期しがたいが、おおまかな趨勢をしめす一つのモデルとして呈示したい。第六圖はこの推計値をグラフ化したもので、實線で示した新土布の價格は、上の線が十八文を基準數とする上限、下の線が十六文を基準數とする下限をあらわしている。點線で示した舊土布の價格は、一八七〇年代には新土布よりも下位にあったのが、七〇年代後半における新土布の急速な價格低下で、兩者は急速に接近する。一時的な逆轉は無視するとすれば、一八八〇年代半ばに、舊土布の價格が新土布を上まわるにいたる。その後は、新土布の價格が一八九一年まで低下しつづけ、一八九〇年代には最低値のあたりで安定してしまつたのに對し、舊土布の方は中

國からの輸出棉花價格の亂高下につれ、かなり激しい一進一退をくりかえしながら、全體的には價格上昇にみまわれた結果、兩者の價格差はひらく一方で、一八九七年に九・五〇一・八文、一九〇二年に一三・〇〇一・五・二文など、十文をこす年もでてきた。基準數にした一八九九年の七・九文の差は、一八九〇年代における平均的な價格差とみてよいだろう。錢建て價格の點でいえば、舊土布は一八八〇年代後半から九〇年代にかけて、新土布にまったくうちできない状態においこまれていたのである。

以上、十九世紀から二十世紀への世紀のかわり目を中心に、機械製綿糸の中國への流入をめぐるいくつかの現象を觀察してきた。これらの觀察結果をもとに、第一の設問に對する一つの試案をまとめておきたい。

十〜二十番手の太糸にかぎられていたインドからの機械製綿糸は、土糸の代替品としてまず中國の非棉作區に流入し、新土布生産の勃興をうながした。インド綿糸で織られた新土布は、保温性、耐久性の點で、土糸で織られた舊土布と比べても、ほとんど遜色はなかった。なによりも丈夫であたたかい労働着をもとめる中國農民の消費類型からいっても、新土布は、舊土布の代替品としてほぼ満足のいくものであった。⁽²⁾しかも、非棉作區の農村に橋頭堡をきずきつつあった折から、インド綿糸は中國市場での消費者價格を大幅に低下させた。

一八七三年にはじまった世界的な不況で、工業製品の價格は長期にわたる下落をみたが、とくにインド綿糸は、中國と同じ銀本位という爲替上の利點もあって、上海での銀建て價格を一八七五〜九一年の間にほぼ半分に低下させた。さらに、一八八〇年代半ばから九〇年代にかけては、中國農村の消費者價格を形成する銀錢比價が急激な錢高にかたむき、インド綿糸の消費者價格、すなわち錢建て價格は相乗的に低下した。一八九二年以降、銀建て價格はかなり急速な反騰にかわったものの、錢高傾向はひきつづき一九〇三、四年まで、急ピッチですすんだため、錢建て價格は底値のあたりで安定しつづけた。

このようなインド綿糸の錢建て價格の急速な低下と十數年におよぶ低値安定の結果、一つの試算では、世紀のかわり目の頃に、新土布は舊土布にくらべ、最高で四五パーセントも安價に提供できるようになった。新土布が中國農村の消費類型に適合

し、品質の點でも舊土布にほとんど劣らないとすれば、この大きな價格のひらきは決定的な意味をもった。ことに商品用土布の生産においては、それが小商品生産の段階にあつたにしても、原料コストと織布能率という二つの面で、インド綿糸の優位性は明白であつた。かつて四川への土布供給を一手にひきうけていた沙市周邊の農村綿業が、一八九〇年代に激増した四川の新土布生産にその市場の多くをうばわれた結果、それまで拒んでいた機械製綿糸を、對抗上、使用せざるをえない立場においこまれたのが、よい例である。⁽²⁾ 全國的にみても、非棉作區から棉作區へという普及過程は、まず非棉作區への舊土布の商品流通をたちぎったインド綿糸が、こんどはコスト競争という市場原理のはたらく商品生産の分野を中心に、棉作區における舊土布の生産地にも侵入して新土布生産への轉換をうながしたというプロセスの想定を可能にする。

かくして、一八八〇年代半ば以降、土糸に對して價格の點で壓倒的な優位にたつたインド綿糸は、おもに商品生産の分野、わけでも強靱さの要求される經糸の分野で、急速に土糸を驅逐して農村市場に浸透していったものと思われる。まして、一八九〇年代には急速な錢高傾向が、地方市場の輸入綿糸流通業者に、取引決濟上のきわめて有利な局面をつくりだし、その積極的な取引意欲をかきたてるような例もあつたのである。このような消費、流通兩面にわたる中國市場の構造が、一八九〇年代における輸入綿糸の爆發的增加をもたらしたことは、まず承認されてよいであらう。

ところで、徐新吾氏らの推計によれば、開國前夜の二八四〇年に中國在來の農村綿業は、六一〇萬擔ほどの土糸を生産し、その中二九〇萬擔ちかくを自家用土布の原糸、三二〇萬擔あまりを商品用土布の原糸にあてたといふ。⁽³⁾ この推計を、機械製綿糸の普及過程と對照するならば、一八九九年の三七一萬四千擔にのぼる機械製綿糸の總供給高は、商品生産用土糸との代替化という面では、たとえその後の土布生産の増加と商品化率の上昇を勘案するとしても、すでに一つの臨界量に達していたといえるかもしれない。もちろん現實の展開は、自家用と商品用を截然と區別できるほど單純ではないが、機械製綿糸の土糸との代替化が、コスト計算のなりたつ商品生産の分野では、比較的容易であつたのに對し、コストではなく現金支出を最少限にとどめようとする意識のはたらく自家用織布の分野では、そうしたやすすくなかつたという傾向は否定しがたい。

ともあれ、中國農村市場の一つの大きな壁が輸入綿糸の前にたちはだかりかけていた折も折、あたかもタイミングをあわせただかのように、輸入綿糸の價格競争力をささえてきた錢高傾向がピークをすぎ、一九〇四、〇五年からは急激な錢安に一轉したため、輸入綿糸と土糸の價格差は、解消ないし再逆轉した。この錢安のいうちをうけて、輸入綿糸の急増は完全に頓挫した。價格差が決定的な意味をもたなくなった農村市場では、機械製綿糸は經糸、土糸は緯糸と、それぞれ得意の分野を中心に共存することになった。二十世紀最初の二十年間、機械製綿糸の總供給高が、四百萬擔のあたりで停滯した原因は、中國農村市場の機械製綿糸に對する受容の臨界量という要素と、錢安傾向を基調とする輸入綿糸の消費者價格急騰という要素とが、時を同じくして作用した點に求めることができる。

三 一九二〇年代の需給關係

第二次急増期は、機械製綿糸が世紀のかわりめにぶつかった臨界量の四百萬擔を突破して、三百萬擔にもおよぶ總供給高の増加を實現した。それを可能にした中國市場の構造的變化は、二十世紀最初の二十年間にすでに萌芽していた。機械製綿糸の總供給高では不變であつた停滯期も、ひとたびその内部にたちいって觀察すると、いくつかの大きな變化を上げていたことがわかる。第一の變化は、第一圖を一見すれば明白なように、輸入分が減少したかわりに、國產分が増加したことである。一九〇四年に百萬擔を突破した國產の機械製綿糸は、その後も着實に生産をのぼし、一九一九年には二四五萬五千擔に達して、自給率も六五パーセントをこえたものと推測できる。國產分と輸入分の比率は二十年で完全に逆になつたわけである。第二の變化は、輸入分におけるインド綿糸と日本綿糸のシェアの逆轉である。二十世紀にはいっても、最初の十年間はインド綿糸が優勢をしめていたが、一九一〇年代にはいって、日本綿糸の急伸とインド綿糸の凋落の結果、一九一四年には日本綿糸一三三萬二千擔、インド綿糸一一三萬七千擔と完全に逆轉した。⁽²⁴⁾

第6表 1905年前後の綿糸、棉花價格（擔當り海關兩）

項目 年	ルピーとの價 比		南通銀錢 比價		輸出棉花		上海綿糸				輸入綿糸	
	1海關兩	指數	1元當り 文	指數	海關兩	指數	海關兩	指數	採算價	利 益	海關兩	指數
1898	2.17	110	900	108	11.51	66	16.52	64	18.10	-1.58	19.94	82
99	2.25	114	900	108	13.00	74	17.00	65	19.83	-2.83	19.89	81
1900	2.23	118	901	109	13.85	79	20.30	78	20.83	-0.53	20.14	82
01	2.22	113	914	110	16.18	92	25.96	100	23.54	+2.42	21.42	88
02	1.95	99	900	108	16.99	97	22.50	87	24.49	-1.99	22.17	91
03	1.97	100	830	100	17.50	100	25.97	100	25.08	+0.89	24.43	100
04	2.14	109	810	98	20.20	115	29.25	113	28.23	+1.02	25.82	106
05	2.25	114	914	110	15.24	87	29.00	112	22.45	+6.55	25.95	106
06	2.46	125	1,080	130	15.11	86	26.51	102	22.30	+4.21	25.30	104
07	2.42	123	1,081	130	17.16	98	25.00	96	24.69	+0.31	24.96	102
08	2.02	103	1,213	146	16.86	96	25.27	97	24.34	+0.93	24.85	102
09	1.95	99	1,317	159	22.81	130	27.68	107	31.28	-3.60	25.42	104
10	2.01	102	1,338	161	22.56	129	29.46	113	30.99	-1.53	26.93	110
11	2.00	102	1,295	156	24.39	139	35.41	136	33.12	+2.29	26.74	109
12	2.27	115	1,313	158	21.13	121	33.49	129	29.32	+4.17	26.73	109
13	2.25	114	1,291	156	21.98	126	29.31	113	30.31	-1.00	26.46	108

出典）ルピーとの比價，輸出棉花，輸入綿糸は楊端六，侯厚培等『六十五年來中國國際貿易統計』36，46，151頁。南通銀錢比價は林學百『近代南通土布史』159～160頁。上海綿糸は *Returns of Trade and Trade Reports* 各年。

備考）採算價は，（輸出棉花價格×3.5+14兩）÷3で出した。價格記載の修正はしていない。

國產分の増加については論ずるべきことは多いが、ここでは前章で論じた銀錢比價のいまひとつの展開局面という範圍でのみ、この問題を考察する。嚴中平氏はおもに對外關係の視點から中國近代綿紡織業史の時期區分をするので、日清戰爭に一つの劃期をおく。いっぽう方顯廷氏をはじめ、國內紡績業の生産力を基準にする人々は、紡錘數の増加速度をてがかりに一八九〇年～一九〇五年を草創期、一九〇五年～一四年を漸進期として日清戰爭の一八九五年ではなく、一九〇五年に一つの劃期をおく。⁽²⁵⁾ たしかに一九〇五年は、生産設備ばかりでなく、ほかのいくつかの指標をとつても、劃期となる年である。

North China Herald の記事をもとに、中井英基氏が作成した上海所在の外資紡四社の配當率をみると、一九〇四年まではほとんど無配であった各社が、一九〇五年には怡和一割六分、老公茂八分、瑞記五分の配當をだし、翌〇六年にはのこる一つの鴻源も八分、怡和二割、瑞記一割、老公茂八分の配當を實現している。⁽²⁶⁾ また同時代の觀察者も、中國の紡績會社は設立以來、苦しい經營をつづけ、とくに一九〇四年までの數年は各社とも缺損

をかさねてきたにもかかわらず、「本年〔一九〇五年〕に入りてよりは各紡績會社とも綿糸一俵〔梱〕につき少なくとも七八兩は利益を上げつつあるなり」と、經營環境の一變をつたえている。この年一梱あたり十五兩内外の利益をあげるケースまで出来たその要因を、觀察者は「原棉安直なるに拘はらず糸價常に高位にあるを以て」⁽²⁷⁾と、いわゆる「紗貴花賤」の現象にもとめている。

一九〇四年以降の急速な錢安傾向は、既述のように輸入綿糸の錢建て價格を急上昇させ、輸入綿糸の壓倒的な價格競争力をそぐ作用を發揮しつつあったが、その反面、第六表にあらわれているように、中國から輸出される棉花の銀建て價格は、一八九八年から一九〇四年まで錢高の進行とともに上昇しつづけ、ついに二〇兩をこえる高値をつけたのが、この錢安傾向への一變も作用して、一九〇五年には一轉してほぼ五兩、率で二五パーセントもの大暴落をみたのである。一方、上海綿糸の銀建て價格は、銀安傾向のあおりもあって一八九九年から一九〇五年まで高騰しつづけた輸入綿糸の動向に追隨して、一九〇四年までは一本調子の高騰をつづけていたものの、錢高による棉花の銀建て價格の高騰で帳消しにされ、採算割れ、あるいは採算ぎりぎりが常態であった。ところが一九〇五年は、綿糸がわずか〇・二五兩の下落にとどまったのに反し、棉花が五兩も暴落したおかげで、一擔當り六・五五兩（一梱當り一九・六五兩）という空前の利益をあげた計算になる。

上海綿糸は、その誕生以來、江南デルタ地帯をおもな市場としてきた。この域内では、内國關稅がいらぬのに對し、ほかの開港場へ移出するとなると、内國關稅の負擔で輸入綿糸に價格の點で對抗できないことも、その一因であった。⁽²⁸⁾ところが、一九〇五年以降の錢安は輸入綿糸の競争力をそいだ反面、中國棉花の銀建て價格暴落という作用で、中國紡績業に原料コストの大幅な引下げをもたらしたばかりでなく、勞働者への賃金を錢で支拂っていた紡績會社（地方の紡績工場には錢で支拂っていた例がある）には、さらに銀建てでの生産コスト引下げをもたらすことになった。その結果、上海綿糸は江南以外の地方でも、ある程度、輸入綿糸に對抗できる力をつけたようである。

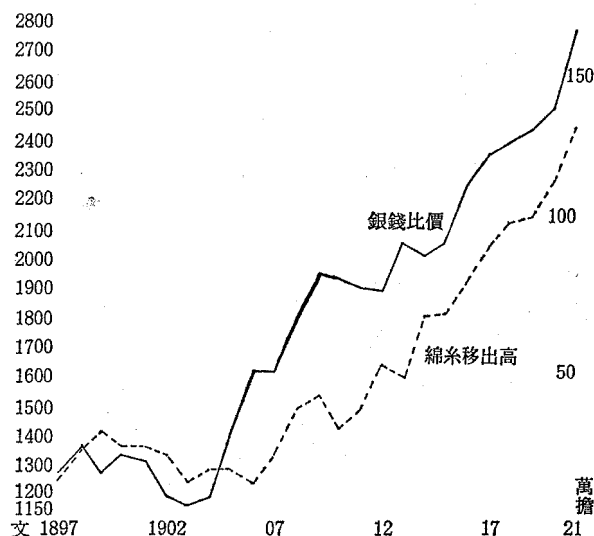
第七表は、重慶における上海綿糸とインド綿糸の標準價格を比較したものである。サンプルが極端にすくなく、しかも番手

第7表 重慶での上海綿糸とインド綿糸の價格（1 梱當り重慶兩）

報告年月	番 手	上 海 綿 糸	イ ン ド 綿 糸
1897. 12	10 番 手	84~ 85	81~ 82
1899. 5	10 番 手	82~ 84	81~ 83
	20 番 手	90~ 91	88~ 91
1901. 8	10 番 手	91	88~ 90
1904. 6	14 番 手	~111.5	107
1912. 末	10 番 手	130~132	127~133.5
	20 番 手	143~144	138~143

出典)『通商彙纂』第89, 136, 200號。『大日本紡績聯合會月報』第143, 245號（明治37年7月25日, 大正2年1月25日）。

第7圖 上海綿糸の移出高と沙市の銀錢比價
（單位：綿糸は擔，比價は1 海關兩當り文）



出典) 上海綿糸移出高は *Returns of Trade and Trade Reports 1897—1919, Part II, Shanghai. Foreign Trade of China 1920, 21, Part I.* 沙市銀錢比價は *Decennial Reports 1892—1901, 1902—11, 1912—21.*

もまちまちであるものの、一九〇四年までは、概して上海綿糸の方が一、二兩から五兩も割高であったのに、一九一二年には原料コストの割合がたかい十番手では、インド綿糸の極端な上、下の値開きの間におさまる程度に、また二十番手でもインド綿糸の最高値に接近したという一端の傾向はうかがうことができる。

一九〇五年以降、錢安の進行とともに、上海綿糸が江南以外の地方でも、輸入綿糸との競争力をもつようになった趨勢は、二年ほどのタイムラグをおくとはいえ、第七圖にも鮮明にあらわれている。揚子江中流域での銀錢比價の代表例として、沙市での比價を

實線であらわし、上海からほかの地方、おおくは揚子江中、上流域へおくりだされた國産機械製綿糸（上海綿糸）の移出高を點線で示している。一九〇六年までは最高でも二六萬七千擔にすぎず、錢高のピークである一九〇三年には十萬擔にまで低下していたのが、一九〇六年を底に〇七年か

第8表 香港輸入のインド綿糸番手別構成

年	番手		14番手以下		16番手		20番手		22番手以上		總計
	梱	%	梱	%	梱	%	梱	%	梱	%	
1885	58,318	39.4	*22,570	15.3	66,938	45.3	18	0.0	147,844		
1886	56,636	39.7	*24,288	17.0	61,761	43.3	50	0.0	142,735		
1887	76,113	41.8	*29,960	16.4	76,044	41.7	35	0.0	182,152		
1888	78,574	43.1	*30,206	16.6	73,279	40.2	131	0.1	182,190		
1889	102,999	52.0	*38,207	19.3	56,545	28.6	210	0.1	197,961		
1890	110,247	58.9	25,305	13.5	51,440	27.5	338	0.2	187,330		
1891	105,228	53.7	24,302	12.4	65,953	33.7	492	0.3	195,975		
1892	128,658	55.7	33,320	14.4	68,341	29.6	572	0.2	230,891		
1893	101,665	56.1	28,084	15.5	51,379	28.3	202	0.1	181,330		
1894	97,235	48.2	29,256	14.5	75,193	37.3	50	0.0	201,734		

出典)『通商彙纂』明治28年第13號 28~29頁。

備考) *印は18番手もふくむ。

第9表 上海におけるインド綿糸の番手別取引高(単位=梱,カッコ内は%)

時期	番手	10番手以下	12番手	16番手	20番手	合計
1892年11・12月		6,583(27.7)	162(0.7)	5,797(24.4)	11,217(47.2)	23,759
1897年5・6月		2,440(23.1)	163(1.5)	2,149(20.3)	5,818(55.0)	10,570
1917年1~6月		17,348(52.4)	15,245(46.1)	496(1.5)	—	33,089

出典) 1892年は『大日本綿糸紡績同業聯合會報告』第4,5號(明治25年12月20日,26年1月31日),
1897年は,『通商彙纂』第68~71號。

1917年は「上海に於ける本年上半期の綿糸状況」—『大日本紡績聯合會月報』第302號(大正6年10月25日)。

第10表 上海に輸入された日本綿糸の番手別割合(%)

時期	番手	14番手以下	16番手	20番手	30番手以上
1904~06年三年平均		1.8	88.5	8.3	1.4
1911~13上半年二年六月平均		0.7	63.7	26.0	9.6
1918年		0.0	46.3	39.5	23.2

出典) 1918年は第31次,第32次『綿絲紡績事情参考書』(大正7年上半年期,同下半年期)。其他は東亞同文會調查編纂部『支那之工業』大正6年2月 162頁(原載は拙著『五四時期の民族紡績業』135頁)。

らは急上昇に轉じ、第一次世界大戰の好景氣もくわつた一九二〇年には一一〇萬擔にまで達した。

二十年にもおよぶ機械製綿糸總供給高における停滯期の間に、上海紡績業を先頭とする中國紡績業は、揚子江流域を主とする全國市場において、急激な錢安傾向をてこにして輸入綿糸に對抗しうる實力をたくわえつつあつたのである。

停滯期における第二の變化は、輸入分における日本綿糸の進出であつた。日清戰爭以降、インド綿糸の後塵を拜して中國市場に參入した日本綿糸も、最初のうちは、インド綿糸のきりひらいた土糸の代替品という用途に、需要先をもとめた。インド綿糸がおもに、十番手と二十番手で市場を開拓していたのに對し、日本綿糸はその中間の十六番手に、ほとんど一點集中していた。また勢力範圍でも、華南、揚子江上流域をおさえるインド綿糸に對し、日本綿糸は揚子江中流域から華北、東北を市場とした。⁽²⁹⁾

しかし、植民地工業の足枷をはめられていたインド紡績業が、長く低番手綿糸の生産に甘んじていた間に、原棉を海外におがざるをえなかつた日本紡績業は、原棉コストの割合が相對的にひくく生産コストの割合が相對的にたかい高番手綿糸の生産割合を徐々にたかめていった。第八表はインド綿糸が本格的に中國市場へ進出しはじめた時期の香港輸入分の番手別構成である。日本への再輸出、香港での消費分もふくんでいるので、一概に中國市場の消費を反映しているとはいえないものの、一つの参考にはなる。二十番手超過がほとんど皆無である點、二十番手がわずか五年で四五・三パーセントから、二七・五パーセントへ急降下している點などが目をひく。純粹に中國だけと限定すれば、第九表が、上海において取引されたインド綿糸の番手別相數を示している。比較する月にばらつきがあるものの、二十番手、二分の一、十番手、十六番手、各四分の一という割合で、中國市場に浸透しはじめたインド綿糸が、急伸期の一八九七年にやや高番手化の傾向をみせながら、最終的には十番手と十二番手に後退していった筋道がみてとれる。現象だけから判斷するならば、インド綿糸は、年をへるにつれて、土糸の代替品という性格をますますつよめていったことになる。

一方、上海に輸入された日本綿糸は、第十表のように、最初の内こそ、十六番手という土糸の代替品に集中していたものの、

短期間のうちに、二十番手から、さらに二十番手超過の分野へシフトし、一九一八年には二十番手超過がすでに四分の一をしめるにいたっていた。さらに中國全體への輸出傾向でいっても、二十番手超過が一九一九年に三分の一をこえ、二四年にはほとんど六割をしめる状況であった。⁽³⁰⁾

周知のように、一九〇五年をさかいに、直隸など新興織布地帯では、日本から導入した鐵輪織機という新しい生産手段で、四十番手以上の細糸を用いた、幅廣の精巧な綿布の生産が開始された。折からおこった對米ボーコット運動の過程で、この綿布には「愛國布」という名稱が冠せられるが、要は、外國から輸入されていた機械製綿布に拮抗しうる品質をそなえていたことで、外國製品ボーコットの象徴的國產品といった呼稱をえたわけである。⁽³¹⁾ 舊土布の代替品として機械製太糸で織られた土布を新土布とよんだのに對し、機械製綿布の代替品をめざし、機械製細糸を原糸にして鐵輪機で織られた幅廣の精巧な土布を改良土布とよんで區別することにしよう。この改良土布が日本綿糸の中國市場への本格的な參入と前後して生産されはじめたのは、けっして偶然のなせるわざではない。

つまり、日本綿糸は最初は、インド綿糸と同じく土糸の代替品すなわち新土布の原糸として、中國市場に參入したのであるが、一九〇五年以降は機械製綿布の代替品である改良土布の原糸という、新たな需要の分野を獲得しはじめたのである。いささか單純にすぎる區別ではあるが、かりに二十番手以下の機械製綿糸を新土布の原糸（ここでは機械製綿糸が新土布の經糸に使用されることが多かった事情を考慮して、二十番手までを土糸の代替品とみなしておく）、二十番手超過のそれを改良土布の原糸と分類するならば、日本綿糸は一九二四年をさかいに、舊土布の代替品生産よりも機械製綿布の代替品生産の分野に、より多くの需要先をもつようになったといえる。この意味で、日本綿糸とインド綿糸は、同じ輸入綿糸とはいえ、ある時點から中國市場における機能にはあきらかな乖離が生じはじめていたのである。

中國紡績業の全國市場進出と、日本綿糸の急伸と高番手化という、以上二つの大きな變化は、孤立した二つの現象としてあったのではなく、たがいに相互作用をおよぼしあいながら、中國における機械製綿糸の需要構造をかえていった。その需要構

第11表 上海在華紡綿糸番手別月産高

時期	14番手以下		16番手		20番手		20番手超過		合計
	梱	%	梱	%	梱	%	梱	%	
1920年1月	300	1.8	13,160	76.8	3,668	21.4			17,128
1924年夏	1,350	3.9	17,900	52.1	13,050	38.0	2,025	5.9	34,325
1926年10月	1,650	4.0	18,000	43.1	18,700	44.8	3,400	8.1	41,750
1926年12月	1,950	4.5	17,300	40.2	19,320	44.8	4,510	10.5	43,080
1927年5月	1,050	2.8	13,000	35.0	16,200	43.7	6,850	18.5	37,100
1927年8月	1,100	3.0	11,050	29.6	18,348	49.2	6,788	18.2	37,286
1927年10月	500	1.8	4,000	14.1	15,000	52.8	8,900	31.3	28,400
1929年	1,262	3.6	7,276	20.6	15,576	44.1	11,201	31.7	35,315

出典) 1920年1月は拙著『五四時期の民族紡績業』139頁。1924年夏は、屋山正一「上海に於ける邦人紡績業」—神戸高等商業學校『大正十三年夏期海外旅行調査報告』240~241頁。1926年10月、1927年10月は「日廠方面之棉紗成本計算」—『紡績時報』第458號(民國16年11月14日)。1926年12月、1927年8月は「上海日廠均注全力改紡細紗」—『紡績時報』第441號(民國16年9月15日)。1927年5月は「特殊權利下之在華日商紡績勢力」—『紡績時報』第424號(民國16年7月18日)。1929年は東亞經濟調査局編『支那紡績業の發達とその將來』29頁。

造の變化は、おもに改良土布生産の擴大と、紡績工場における兼營織布の發展という二つの點に求められる。まず、改良土布の原糸である中糸、細糸の供給状況からみることにしよう。

周知のように第一次世界大戰をはさんで、日本綿糸は急速に中國市場での輸出競争力を喪失していった。とくに、原棉コストの割合がたかい低番手綿糸では、すでに第一次大戰前から競争力をつけた中國綿糸にたちうちできない状態におちいつていた。「在華紡」というかたちの資本輸出の動機の一つは、「太糸工場を支那に興すべし」という富士瓦斯紡績社長和田豊治の主張に集約されるように、この劣勢を挽回するため、日本の國內工場と現地工場との間で垂直分業をおこなうという構想にあった。⁽³²⁾

かくして「在華紡」は土糸の代替品である太糸の生産をうけもち、日本國內の紡績工場は改良土布の原糸となるはずの中糸・細糸をうけもつといった垂直分業の確立をめざして、大規模な資本輸出がはじまった。しかしそれもつかのま、二〇年代にはいると、中國と日本の生産コストはさらに大きな開きを生じ、二十番手超過の中糸・細糸の分野でも日本綿糸は輸出競争力をうしなない、その生産は「在華紡」によって肩がわりされることになった。第十一表からは、季節變動を考慮にいれる必要があるとはいえ、二〇年代を通じて「在華紡」が、二十

第12表 1923年山東に於ける青島綿糸の番手別販賣高

地方	番手	14番手以下		16番手		20番手		20番手超過		合計
		梱	%	梱	%	梱	%	梱	%	
濟南		2,250	5.1	25,900	59.1	11,350	25.9	4,315	9.8	43,815
濰縣		450	1.6	9,500	34.4	15,600	56.5	2,052	7.4	27,602
昌邑		450	3.9	750	6.4	6,550	56.2	3,902	33.5	11,652
周村		150	2.2	5,250	78.2	1,050	15.6	262	3.9	6,712
博山		250	6.8	2,550	69.8	850	23.3	5	0.1	3,655
青州		—		4,000	96.3	150	3.6	5	0.1	4,155
卽墨		10	0.1	9,050	83.2	1,800	16.6	12	1.1	10,872
手護		50	1.1	3,300	71.6	1,250	27.1	7	0.2	4,607
高密		—		12,275	83.3	2,450	16.6	5	0.0	14,730
掖縣		50	3.5	775	54.4	550	38.6	50	3.5	1,425
膠州		25	1.0	2,600	99.0	—				2,625
※徐州		4,000	55.7	3,000	41.8	—		175	2.4	7,175
※高陽		—		2,000	34.8	2,600	45.2	1,150	20.0	5,750
合計		7,685	5.3	80,950	55.9	44,200	30.5	11,940	8.2	144,775

出典) 佐々木藤一「青島紡績業に就きて」—神戸高等商業學校『大正十三年夏期海外旅行調査報告』269~270頁。

備考) ※印は他省。太字は改良土布の生産地。手護については未詳。

番手超過の分野における輸入日本綿糸急減のあとをうめるように、高番手化をおしすすめていった一定方向の状況をうかがうことができる。一九二〇年には、「在華紡」の綿糸は、かつての輸入日本綿糸と同じく、十六番手綿糸にほとんど集中し、二十番手も少しはあったものの、二十番手超過は皆無であった。それが、輸入日本綿糸の凋落が決定的となった一九二四年をさかいに、高番手化が一舉に加速し、一九二九年には二十番手超過が三分の一をしめるにいたった。この年の「在華紡」綿糸の番手別構成は、ちょうど十年まえの一九一九年における輸入日本綿糸の番手別構成(十四番手以下、〇・八パーセント、十六番手、二四・四パーセント、二十番手、三七・一パーセント、三十番手以上、三七・六パーセント)⁽³³⁾に近似している。輸入日本綿糸撤退のあとを、「在華紡」綿糸が完全にうめたといえる。輸入日本綿糸がぎりひらいた改良土布の原糸という新たな需要先も、もちろん「在華紡」綿糸がひきつぐことになった。

第十二表は、一九二三年において、青島から出荷された機械製綿糸(輸入日本綿糸、青島の「在華紡」綿糸)が、山東省(隣接の省も一部ふくむ)のどの地方で、どのような番手

第13表 民族紡の綿糸番手別生産比率の變化 (%)

1917 → 1920	番 手		14番手以下	16 番 手	20 番 手	20番手超過	
	區 分						
1932	地方(1917年江蘇, 浙江, 湖北)		33	67	—	—	
	上海 (1920年1月 13工場)		—	85	15	—	
	番 手		14番手以下	16 番 手	20 番 手	20番手超過	其 他
	區 分						
1932	地 方 (15 工 場)		36	34	25	3	2
	上 海 (10 工 場)		22	14	42	14	8
	合 計 (25 工 場)		29	24	34	9	4

出典) 1932年は王子建, 王鎮中『七省華商紗廠調査報告』國立中央研究院社會科學研究所叢刊第7種
商務印書館 民國24年11月 附録I頁。1917~20年は拙著『五四時期の民族紡績業』138~139
頁。

別構成で消費されたかを示している。一九二三年といえは、第一次世界大戦後、簇生した青島の「在華紡」がほぼ出そろった時期であり、輸入日本綿糸から「在華紡」綿糸への轉換がはじまった過渡期に位置する。二十番手超過の絶対量、あるいは比率がとびぬけてたかいは、濟南、濰縣、昌邑、そして隣省、直隸の高陽である。いずれも、鐵輪機による改良土布の織布で有名な地方である。⁽³⁴⁾とくに三〇年代に、高陽をぬきさって全國屈指の改良土布の産地となった濰縣、昌邑は、青島の「在華紡」から提供される安價な高番手綿糸(膠濟鐵道の沿線で青島に近いので、流通経費がほとんどかからない)を原動力に、その地位をきずいたといわれている。⁽³⁵⁾

他方、民族紡績業も、その誕生以來ながく、土糸の代替品たる太糸を手がけ、インド綿糸も日本綿糸ももたない十四番手という独自の領域も開拓していた。しかし「黃金時期」を経過して「在華紡」の雪崩的進出がはじまると、「在華紡」とあまり市場圏のかさならない地方の民族紡はまだしも、「在華紡」と競合する沿海地方、とりわけ上海の民族紡は、「在華紡」との對抗上、たとえ後手にまわるうらみはのこしつつも、やはり高番手化を追求せざるをえなかった。

いま、一九二〇年代における民族紡の高番手化の趨勢を詳細にあとづける數字はもちあわせないものの、十年あまりの間の變化を一瞥する資料として、第十三表を作成した。後半の一九三二年の數値は、三二年十一月から三三年六月にかけて七ヶ月あまりをついやしておこなわれた中國人の實地調査にもとづいている。それに反して前半は、一九一七年の地方は臺灣銀行調査課、一九二〇年の上海は上海日本綿糸同業會、

とそれぞれ日本人が一部推計をまじえてわりだした比率である。とくに一九二〇年の上海は、一月だけの數値にもとづいてゐるので、とうぜん季節的な偏りが想定される。このように精粗まちまちの數値ではあるものの、それらの比較からは、二〇年代における變化が一定の方向性をもっていたことがよみとれる。

一九二〇年以前においては、「在華紡」ですら二十番手超過はほとんど皆無であつた。民族紡でも事情は同じで、二十番手超過の分野は輸入日本綿糸のほぼ獨占市場であつた。民族紡は地方、上海をとわず、かつての輸入日本綿糸の獨壇場であつた十六番手に生産の主力をおいていた。地方では十四番手以下を三分の一ほど生産して、インド綿糸と對抗していたのにたいし、上海では二十番手を十五パーセント生産して、さきの第十一表の「在華紡」にちかい番手別構成であつた。この時點ですでに、地方と上海の格差は明瞭であつた。

一九三二年になると、地方では、十四番手以下の比率はさほどかわらないものの、十六番手が半減して、二十番手、四分の一、さらにわずか三パーセントながら二十番手超過も生産するようになった。一方上海では、生産の主力は完全に二十番手にくつて四割以上をしめ、二十番手超過も十四パーセントと、二〇年の二十番手の比率が一段上昇したかたちになった。番手別構成が「其他」もふくめて分散してしまつた分、上海と地方の格差はいささか不分明になつた感もあるが、二十番手における十七パーセントの差、二十番手超過における十一パーセントの差は、兩者の格差が二〇年代を通じて、よりいっそうひろまつたことを示している。

民族紡全體では、二十番手が三分の一以上で主力となり、二十番手超過も一割ちかくをしめるにいたつた。この大きな變化が、一九二〇年代のどの時點からはじまつたかは、いまのところ詳らかにできないものの、一九一〇年代から二〇年代前半にかけての輸入日本綿糸、二〇年代後半からの「在華紡」綿糸がたどつた高番手化の道を、民族紡もまたおくれればせながらあゆみはじめただけはたしかである。

こうして、おそらく一九二〇年代後半から「在華紡」に追隨するかたちではじまつたものと思われる民族紡綿糸の高番手化

第14表 1932～35年各國籍紡績工場番手別綿糸出荷高（單位＝公擔）

國籍	番手別	14番手未満		14番手・16番手		20番手		20番手超過		合計
		公 擔	%	公 擔	%	公 擔	%	公 擔	%	
華 商	1932	809,644.675	23.2	979,170.528	34.1	846,256.054	29.4	240,484.742	8.4	2,875,555.999
	33	761,120.191	26.8	1,010,896.684	35.7	778,157.703	27.4	285,020.029	10.1	2,835,194.607
	34	810,308.031	28.9	1,032,406.559	35.8	726,157.840	25.9	233,975.780	8.3	2,802,848.210
	35	707,750.712	27.0	855,098.320	32.6	831,540.720	31.7	229,264.604	8.7	2,623,654.356
日 商	1932	17,804.254	1.5	338,003.777	28.5	385,407.549	32.6	442,732.828	37.4	1,183,948.408
	33	29,715.292	2.3	324,810.104	25.5	411,731.038	32.4	506,070.301	39.8	1,272,326.735
	34	19,306.541	1.6	292,799.223	24.8	393,328.801	33.3	477,082.418	40.3	1,182,516.983
	35	19,260.253	1.5	257,444.617	19.9	472,832.322	36.5	545,247.719	42.1	1,294,784.911
英 商	1932	5,423.169	5.4	4,226.826	4.2	89,292.307	88.4	2,033.831	2.0	100,976.133
	33	4,885.333	8.6	660.437	1.2	49,149.583	86.8	1,904.564	3.4	56,599.917
	34	5,058.781	10.0	283.035	0.6	41,645.531	82.1	3,739.124	7.4	50,726.471
	35	5,657.136	10.7	—	—	32,511.229	61.2	14,930.675	28.1	53,099.040
合 計	1932	832,872.098	20.0	1,321,401.131	31.8	1,320,955.910	31.8	685,251.401	16.5	4,160,480.540
	33	795,720.816	19.1	1,336,367.225	32.0	1,239,038.324	29.8	792,994.894	19.0	4,164,121.259
	34	834,673.353	20.7	1,325,488.817	32.8	1,161,132.172	28.8	714,797.322	17.7	4,036,091.664
	35	732,668.101	18.4	1,112,542.937	28.0	1,336,884.271	33.7	789,442.998	19.9	3,971,538.307

出典）嚴中平『中國棉紡織史稿』365～366頁より作成。

備考）出荷高には、兼營織布の原糸はふくまない。20番手超過には、ごく少量の未詳分もふくむ。

は、上海と地方との間でかなり大きな格差をとめないながら、改良土布の原糸供給に新たな擔い手を登場させることになった。その一應の歸結が、一九三〇年代前半における資本國籍別の番手別綿糸出荷高を示した第十四表である。⁽³⁶⁾イギリス紡は絶対量がすくないので無視するとして、二十番手超過の出荷高では、やはり「在華紡」が數歩リードしていた。番手別比率でも「在華紡」は四〇パーセント前後に及び、しかも年をおうごとに着實に比率を上昇させている（四年で約五パーセント上昇）のに對し、民族紡は一〇パーセントの線をはさんで足ぶみしている。さきの第十三表の民族紡における上海と地方の格差とかさねてみると、「在華紡」、上海民族紡、地方民族紡という三者の間に、垂直分業態勢ができていたことがわかる。

このような垂直分業から生産された中國綿糸はいかに消費されたのであろうか。一九三四年における需要状況を山東、湖南、四川の三省についてみると、第十五表のようになる。山東は、青島の「在華紡」のほぼ獨占市場であるのに對し、湖南、四川はともに、上海、漢口、長沙の各民族紡が番手別に勢力分野をわちあっていた市場である。改

第15表 1934年綿糸番手別消費高

省	番 手	14番手以下		16 番 手		20 番 手		20番手超過		合 計 梱
		梱	%	梱	%	梱	%	梱	%	
山 東	東	3,585	1.9	74,463.5	39.3	56,063.5	29.6	55,359	29.2	189,471
湖 南	南	6,866.5	9.1	29,933.5	39.5	27,486.5	36.2	11,574.5	15.3	75,861
四 川	川	26,850	26.1	13,035	12.7	52,245	50.8	10,650	10.4	102,780

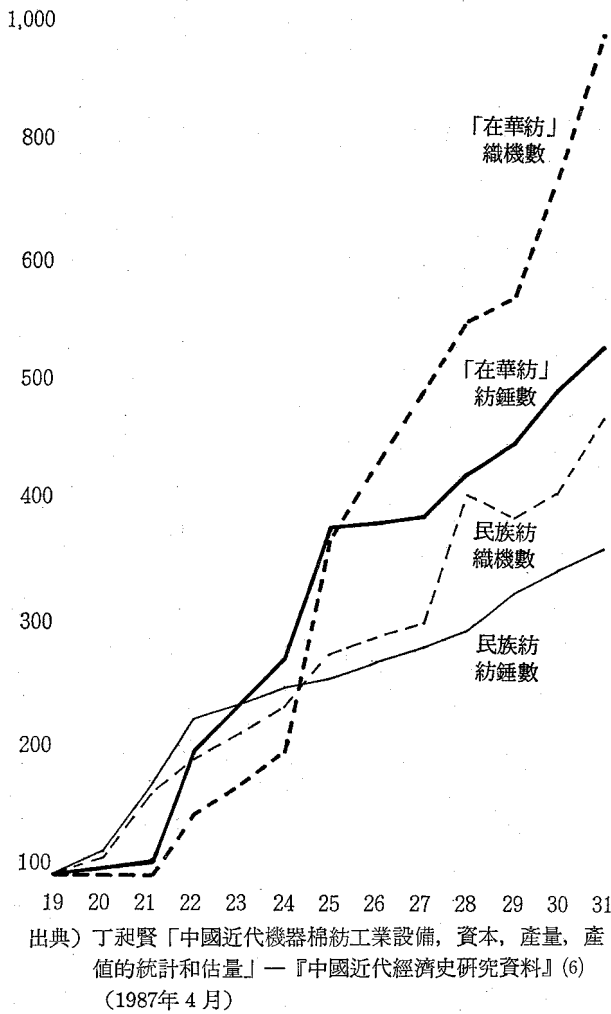
出典) 山東は『山東紡績業の概況』北支經濟資料第12輯 滿鐵天津事務所調査課 昭和11年3月 27頁。湖南は孟學思編『湖南之棉花及棉紗』下編 湖南省經濟調査所叢刊 民國24年7月 21頁。四川は「四川之棉紗業」—『四川月報』第5卷第1號(民國23年7月) 18~22頁。

良土布の生産では、つねに一步を先んじていた山東では、二十番手超過がすでに三分の一にせまっていた。かつてインド綿糸の獨占市場であつた四川では、十四番手以下と二十番手に兩極分解しているが、なお土糸の代替品を求める需要傾向が濃厚である。湖南でも、二十番手超過の割合はやや高まっているものの、四川とほぼ同じ傾向の市場であつた。

かかる地域差をともしないながらも、中國全體では、第十四表のように、一九三三年に、二十番手超過の綿糸を、七九萬三千公擔Ⅱ一三一萬一千擔(一擔Ⅱ〇・六〇四八公擔で換算)も出荷するようになったのである。あとの計算との關係から一九三四、三五年の平均をだすと、七五萬二千公擔Ⅱ一二四萬三千擔になる。一九一九年には二十番手超過の綿糸は、中國國內では一切生産せず、日本綿糸とイギリス綿糸のみが供給していたと假定すれば、その供給高は、十八萬八千擔(ただしイギリス綿糸は六六擔にすぎない)だったことになる。一方、一九三四、三五年の平均供給高は、二萬一千擔の輸入綿糸がすべて二十番手超過であつたと假定すると、出荷高とあわせて一二六萬四千擔となり、一九一九年に比べて、一〇七萬六千擔ふえた計算になる。機械製綿布の代替品たる改良土布の生産擴大が、この新たな機械製綿糸の中糸、細糸の分野での需要増加をもたらしたのである。

いまひとつの需要構造の變化をしめす紡績工場の兼營織布については、もはや多くを述べる必要はあるまい。紡績の高番手化が、より附加價值のたかい製品を生産するという點で、紡績業發展の一つのバロメーターになるとすれば、紡績工場の兼營織布への進出は、綿糸という半製品よりも、いっそう附加價值のたかい綿布という全製品を生産するという意味で、さらにいちだん高い發展段階をしめすバロメーターといえる。「在華紡」は、一九二〇年代

第8圖 「在華紡」と民族紡の紡錘數・織機數の指數
(1919年=100)



半ばの高番手化開始とほぼ時を同じくして、兼營織布への進出の歩調もはやめはじめた。

第八圖は、「在華紡」の紡錘數(太い實線)と織機數(太い點線)、民族紡の紡錘數(細い實線)と織機數(細い點線)について、一九一九年を二〇〇とする指數をくらべたものである。「在華紡」と民族紡の對比でいえば、「民族工業の黄金時期」の餘熱がのこっていた一九二三年までは、民族紡の方が發展の速度がはやいが、その後は「在華紡」が大きく水をあけることになる。とりわけ、織機數ではその傾向が顯著である。「在華紡」も民族紡も、二〇年代半ばまでは、紡錘數の増加が織機數のそれを上まわっていたのが、二五年から二六年にかけて逆轉した。兼營織布への進出を加速した狀況がうかがえる。「在華紡」の場合、織機數はわずか十年で、十倍にふえたわけである。

ある推計によれば、一九一九年の兼營織布の生産高は、三五萬四千疋にすぎなかつたとい⁽³⁷⁾う。一疋あたり十一・二ポンドの綿糸をもちいるとすれば、合計二九萬七千擔の綿糸を消費した計算になる。一方嚴中平氏の紹介する統稅署の報告によれば、一九三四、三五年の平均では、一四三萬一千公擔⁽³⁸⁾二三六萬六千擔の綿糸が兼營織布に消費されたとい⁽³⁸⁾う。兩者の差、二〇六

萬九千擔が、二〇年代において兼營織布がうみだした機械製綿糸の新たな需要増加ということになる。

以上のようにわりだされた改良土布（より正確には二十番手超過綿糸を原糸とする土布）の増加分、一〇七萬六千擔、兼營織布の増加分、二〇六萬九千擔をあわせると、三一四萬五千擔となり、第二次急増期における機械製綿糸總供給高の増加分、三〇八萬三千擔を十分に吸収しうる量に達する。⁽³⁹⁾第二次急増期の需要増加は、中國市場における改良土布と兼營織布の發展に起因するものとみなしても、大過はあるまい。

兼營織布は、いうまでもなく機械製綿布を提供するものであった。改良土布も、その誕生の経緯からしてすでに、機械製綿布の代替品という役割をになうべきものであった。一九一九年から一九三四、三五年までの兩者の増加分は、ともに一疋當り十一・二ポンドの綿糸をつかうとすると、兼營織布は二、四六三萬一千疋、改良土布は一、二八一萬疋、合計で三、七四四萬一千疋と計上される。ところで、機械製綿布の輸入高は、一九〇五年日露戰爭時の三、五七六萬疋、一九一三年の三、〇七五萬四千疋など極端に多い年もあったが、一九一〇年代は平均で二千四百萬疋ほどであった。⁽⁴⁰⁾一九一九年の二、四八七萬九千疋という、ほぼ平均にちかい數値を、一九三四、三五年の換算平均、二六八萬九千疋とくらべると、機械製綿布の輸入高はこの間に、二、二一九萬疋減少したことになる。一九二〇年代における改良土布と兼營織布の生産増加は、兼營織布だけでも輸入綿布をほぼ完全に驅逐して、なおあまりある供給増をはたしたのである。

第二次急増期における機械製綿糸の供給増加分は、兼營織布による機械製綿布と改良土布というかたちをとって、輸入綿布の驅逐に寄與した。一八七〇年前後から、半世紀以上の長きにわたって、中國綿布市場のほぼ二割をしめつづけてきた輸入綿布を、一九三〇年代にいたって、中國の近代적綿工業が驅逐したことの意義は大きい。⁽⁴¹⁾しかし、その過程でつねに先端をきっていたのは、「在華紡」という、商品輸出から資本輸出に姿をかえた日本紡績業の落し子であった點は、くれぐれも銘記される必要がある。

むすび

最後に、本稿でたどってきた機械製綿糸の普及過程を、中國近代における綿製品供給の動向をさぐった第十六表の綿業推計で再點検することを以て、むすびにかえたい。

開國前夜の一八四〇年についてはすでにふれた。土糸の生産高六一〇萬擔あまりの中、商品生産用の土糸が三二〇萬擔あまりもあったと推計される點に再度、注意をうながしておきたい。一八八一—九〇年にはまず外國綿布の流入が目立ち、都市部を中心に晴れ着用として二〇パーセントちかくのシェアをしめた。輸入機械製綿糸による織布（新土布）はまだ一割にもみたない。兩者あわせて、舊土布の市場を四分の一ほど侵蝕した。次の一九〇一—一〇年に移行する前の十年は、錢高を背景とする機械製綿糸の第一次急増期であった。國產分が一〇〇萬擔を突破し、輸入分をあわせた機械製綿糸の供給高は、三五〇萬擔ちかくに急上昇し、開國前夜の商品生産用土糸に完全にとつかわりうる量に達した。その分土糸の生産はおちこみ、開國前夜の四割程度になつてしまつた。こうして新土布はミニマムの假定でも三〇〇萬擔、マクシマムの假定では四五〇萬擔をしめるま⁽⁴⁾でになつた。しかし、機械製綿糸に對する需要は第一の臨界點にさしかかり、錢安のおうちをうけて停滯的であつた。

一九二一—三〇年は、第二次急増期にあたる。第一の臨界點をのりこえる新しい需要が兼營織布と改良土布によつてほりおこされつゝあつた。「黃金時期」を経過した中國紡績業は、「在華紡」の雪崩⁽⁵⁾的な進出もくわつて、生産高をほぼ五倍にひきあげた。輸入綿糸は競争力をうしなつて、凋落の一途をたどつていた。土糸は自家消費用あるいは商品用でも緯糸の分野で頑強に存続し、「黃金時期」の機械製綿糸暴騰の折には、失地回復の兆しさえあつた。

第二次急増期をすぎた一九三四、三五年には、輸入綿糸につづいて輸入綿布も驅逐され、ほとんど無視してよい存在になつた。國產機械製綿糸の國內向供給高は七八〇萬擔をこえた（輸出は三四萬四千擔）。嚴中平氏の推計では、三一—一萬三千擔が

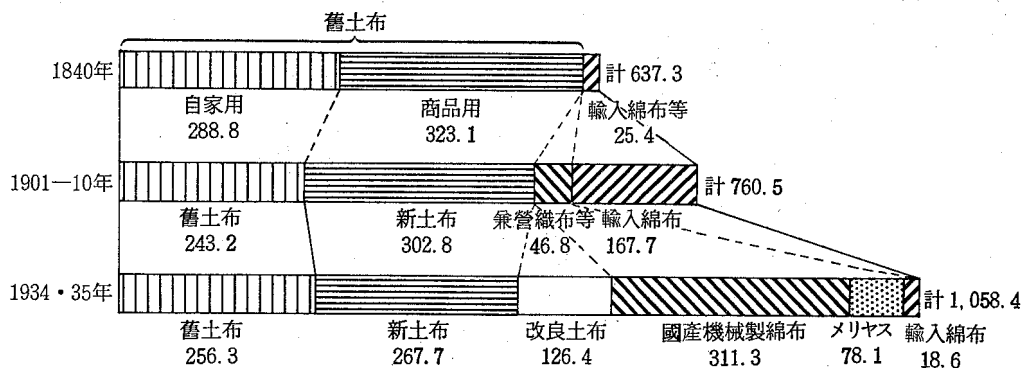
第16表 中國近代綿業推計 (單位=萬擔, カッコ内は%)

種別 時期	輸入綿布 綿糸換算	機械製綿糸		土糸	合計	人口 (百萬人)	1人當り 斤
		輸入分	國產分				
(1)1840年	22.9(3.6)	2.5(0.4)	—	611.9(96.0)	637.3	400	1.59
(2)1881—90年	121.1(19.5)	46.5(7.5)	—	453.4(73.0)	621.0	375	1.66
(3)1901—10年	167.7(22.1)	236.2(31.1)	113.4(14.9)	243.2(32.0)	760.5	425	1.79
(4)1921—30年	186.8(17.6)	59.2(5.6)	561.1(52.9)	252.7(23.8)	1,059.8	475	2.23
(5)1934・35年	18.6(1.8)	2.1(0.2)	781.4(73.8)	256.3(24.2)	1,058.4	500	2.12

出典) (1)は許蔭新・吳承明『中國資本主義發展史』第1卷 318—325頁等。(2)は Albert Feuerwerker, "Handicraft and Manufactured Cotton Textiles in China, 1871—1910" *Journal of Economic History* Vol. 30 No.2, June 1970 の1871—80年について行った推計方法を 1881—90年に應用。棉産は同じく 700 萬擔とした。(3)は同じく Feuerwerker の推計による。ただし, (4), (5)と整合性をもたせるため, 機械製綿糸の落棉率を15%から10%に下げ, 國産分の機械製綿糸を105.5萬擔から113.4萬擔に上げた。また, 1905年の輸入綿布は日露戦争の特需をみこんだ迷惑輸入で異常に多いので, 除外して9年間の平均にした。(4)は筆者の推計。棉産額を1,079.4萬擔(『中國棉紡統計史料』116—117頁所載の棉産統計の中, 1921—30年の10年平均を1.5倍した), 國産分の機械製綿糸を580.3萬擔(基本的には趙岡, 陳鍾毅『中國棉業史』295—296頁の推計による。ただし, 22年だけは不自然な數字なので, 銓數に1.9擔をかけて算出)とした。(5)は嚴中平の推計を修正した中井英基「中國農村の在來綿織物業」—安場保吉, 齋藤修編『プロト工業化期の經濟と社會 國際比較の試み』による。ただし土糸の計算の結果はことなる。(2)~(4)の輸入綿布量は *Decennial Reports, 1922—1931* I, pp. 113, 182. (5)は嚴中平『中國棉紡織史稿』368頁の方碼表示を297頁の換算方法で擔になおした。

- 備考) 1 輸入綿布の綿糸への換算は1疋=11.2ポンドで計算した。
 2 機械製綿糸の落棉率は10%, 土糸の落棉率は5%で計算した。
 3 詰棉等の棉花消費量は, 1人當りの綿布消費量1.5匹を推計の出發點とした(1)の0.52斤を除いて, ほかはすべて1人當り0.6斤とする。
 4 (1)の土糸は商品生産用323.1萬擔, 自家消費用288.8萬擔と推計される。
 5 (4)(5)の國産分機械製綿糸からは, それぞれ19.2萬擔, 34.4萬擔の輸出分をさしひいてある。
 6 (5)の國産分機械製綿糸は機械織の原糸311.3萬擔, メリヤス織等の原糸78.1萬擔, 土布の原糸392萬擔の内譯となる。
 7 中國からの輸出綿布は推計から除外した。

以上の數値を綿布によみかえて, 簡単に圖式化すると, 以下のようになる。(數字の單位は萬擔)



備考) 圖中では, 新土布を経緯とも機械製綿糸として計上したが, もし新土布をすべて混織と假定すると, 1901—10年は, 機械製綿糸302.8萬擔(残りは兼營織布11.8萬擔, メリヤス等35萬擔と計上), 土糸151.4萬擔, 計454.2萬擔が混織布に, 土糸の残り91.8萬擔が舊土布に使用され, 1934・35年は機械製綿糸267.7萬擔, 土糸133.9萬擔, 計401.6萬擔が混織布に, 土糸の残り122.4萬擔が舊土布に使用されたことになる。したがって20世紀にはいってからは, 舊土布が最少で100萬擔前後, 最多で250萬擔前後, 殘存していたと推計される。

機械製綿布の原糸に使用されたという。輸入綿布分とあわせて、三二九萬九千擔、比率で三一・二パーセントが機械製綿布として供給された。國產機械製綿糸の中、土布の生産に供給されたのは、機械織の原糸三一萬三千擔とメリヤス業等の原糸七八萬一千擔とをさしひいたのこりの三九二萬擔という計算になる。⁽⁴³⁾これに輸入綿糸二萬一千擔、さらに根づよくのこる土糸の二五六萬三千擔をあわせて、六五〇萬四千擔が土布生産の原糸になったとすると、機械製綿糸六割、土糸四割の割合になる。⁽⁴⁴⁾

この一九三四、三五年の綿業推計からは、機械製綿布の供給量が三割をこえたこと、土布の原糸として土糸がなお四割をしめていたこと、といった二つの全體像がうかんでくる。それから五年ほど後の個別的な例では、四川省巴縣興隆郷で機械製綿布の消費量が二割程度であったこと、江蘇省南通縣金沙地區總廟で土布生産の原糸に三割ちかくの土糸がもちいられていたことを、本稿の冒頭で確認した。このミクロの數字は、前者が比較的開けた地區といってもやはり農村で、都市にくらべれば消費類型が土布に適合していること、また後者が有名な織布地帯で土布の商品化率がたかく、その分機械製綿糸への依存がたかまること、さらに兩者とも情況は異なるとはいえ、抗日戦争のさなかにあったことなどいくつかの事情を考慮にいれるならば、五年ほど前の全國的な情況と比較して整合的に理解できない數字ではない。

ミクロとマクロ、兩面からの觀察は一致して、中國農村の土布生産は、開國前夜の二八四〇年から一世紀の長きにわたって、若干の消長はともないながらもその生産規模を維持しつづけたことを證明している。しかし、その生産規模の維持は、おもに商品生産用の分野における土糸から機械製綿糸への轉換という大きな變動をともなった。しかもその轉換の過程は、一世紀にわたって徐々にまんべんなく、進行したのではなく、十九世紀末の十數年間に銀錢比價の激動と歩調をあわせながら一舉に完了してしまつた。二十世紀にはいると、農村織布における機械製綿糸の需要は、改良土布の登場による高番手綿糸の比率上昇といった質的な變化はみられるものの、量的にはさほどのびず、機械製綿糸の新しい需要増加は、都市の近代적織布工場になうことになつたのである。第一次急増期の需要をささえたのが、ほとんど農村の在來セクターであつたのに對し、第二次急増期のそれは、おおくは都市の近代セクターがぎりひらいたのである。

注

- (1) 本文の假定とは反對に、土糸はすべて混織の緯糸に用いられたとすると、綿糸使用量比を緯一、經二として、土糸八一七斤、機械製綿糸一、六三四斤、計二、四五一斤が混織新土布に、機械製綿糸の残り五〇三斤が混織でない新土布に用いられたことになる。舊土布の割合は、本文の假定で三割弱、本注の假定でゼロと算定された。實際の割合はこの間の一點に指定できる。頭總廟の紡織狀況については、(滿鐵)上海事務所調査室編『江蘇省南通縣農村實態調查報告書』昭和十六年三月三二、一一八—一二四頁、附第十一表、また南通全體については、林學百『近代南通土布史』張謇與南通研究叢刊之一 南京大學學報編輯部 一九八四年一月序 參照。
- (2) 輸入分の内譯は、*Reprints of Trade and Trade Reports 1900*, Part I. 國産分は丁昶賢「中國近代機器棉紡工業設備、資本、產量、産值的統計和估量」——『中國近代經濟史研究資料』(6) (一九八七年四月)の當該年鍾數に一・九擔をかけて算出。
- (3) 小山正明「清末中國における外國綿製品の流れ」——『近代中國研究』第四輯 東京大學出版會 一九六〇年七月刊行。同書 三一頁の「外國綿糸總輸入量とその各地區への配分」という表によつて、一八八九年と九九年の地區比率(パーセント)をくらべると、C地區(揚子江中、上流域)は、六・三から二九・九へ急増、B地區(おもに華北)は、一八・〇から二二・一へ漸増、F地區(華南)は、六五・一から二四・七へ急減した。一八九〇年代における輸入綿糸の激増は、揚子江中、上流域が先頭にたち、華北が追隨して實現したことがわかる。
- (4) 小山正明 前掲論文 七九頁。
- (5) 嚴中平『中國棉紡織史稿』科學出版社 一九五五年九月刊 五七、七二頁。嚴中平氏はまた、一八六七—九一年の長期にわたり、中國棉花の價格が、一擔當り十兩前後では一定していたことも、インド綿糸の相對價格をいっそう低くし、土糸に對する優位性をました點を指摘している(同書 六五頁)。海關兩とポンドのレートは、楊端六、侯厚培等『六十五年來中國國際貿易統計』國立中央研究院社會科學研究所專刊第四號 民國二十年刊 一五一頁。インド綿糸と中國市場の問題については、小池賢治「インド綿業と市場問題——十九世紀後半期のボンベイを中心に」——『アジア經濟』第十六卷第九號(昭和五十年九月十五日)が示唆的である。
- (6) 以上、「草市ニ於ケル綿糸商況」——『通商彙纂』明治四十年第二十號 九頁。
- (7) 以上、「沙市ニ於ケル織物商況」——『通商彙纂』明治三十九年第三十四號 七—九頁。
- (8) 楊端六『清代貨幣金融史稿』三聯書店 一九六二年七月刊 二二四—二二六頁によると、中國での銅地金價格は、一擔當り一八八七年の九・六一海關兩から一九〇二年の三六・〇五海關兩へ、十五年では四倍に暴騰し、これが錢高の大きな原因になったという。
- (9) 「沙市八月商況」——『通商彙纂』第四百十八號(明治三十二年) 三三頁。
- (10) 『支那經濟全書』第六輯 東亞同文會 明治四十二年五月四版 五一九—五二二頁、久重福三郎「銅元問題」——『支那研究』第十號(大正十五年五月) 五五—六三頁など參照。
- (11) 銀兩表示の「滙票」の代金を、錢で返済する際のレートは、どの時點でのレートによるのかが、當然問題になる。「滙票」とりくみの時點のレートによるのであれば、正頭舖に錢高のメリット・錢安のデメリットはない。「滙票」代金返済時に適用するレートを直接、説明している資料はいまのところみあたらないが、一般商店が錢舖に預金する際、「銅錢ヲ預ケ入ルル場合ニハ時價ニ依テ銀兩ニ換算」(沙市金融事情)——『通商彙纂』明治四十年第二十號 二六頁)したという事例からみて、返済時點のレートが適用されたものと考えられる。以下の本文で紹介する錢安の時事例も、その傍證となる。
- (12) 前掲「沙市ニ於ケル織物商況」 八頁。
- (13) 「錢票、及湖北銀通用ノ現況并銅錢騰貴之狀況」——『通商彙纂』第

六十九號（明治三十年） 四三、四六頁。

- (14) 「清國沙市ニ於ケル流通貨ノ情況」——『通商彙纂』第四十六號（明治二十九年） 二頁。

- (15) 以上、「清國に於ける銅錢下落と貿易」——『大日本紡績聯合會月報』第百九十九號（明治四十二年三月二十五日） 二二、二三頁。

- (16) 以上、「湖南省常德ニ於ケル本邦綿糸商況」——『通商彙纂』明治四十年第五十二號 一六頁。

- (17) 前掲「沙市ニ於ケル織物商況」 九頁。

- (18) 「沙市三月商況」——『通商彙纂』第百三十二號（明治三十二年） 二二頁。

- (19) 以上、宜昌での例は「宜昌ニ於ケル機械織業」——『通商彙纂』明治三十九年第五十九號 三二頁。河北省定縣での例は河北省縣政建設研究院『定縣經濟調查一部份報告』民國二十三年十月 二四六頁。ただし、原數字は重量單位がまちまちなので、土糸一市斤〇・八五斤、機械製綿糸一塊〇・七・八七五斤で、斤に換算した。第一次世界大戦期における土糸の競争力回復については、拙著『五四時期の民族紡績業』——『五四運動の研究』第二函 同朋舎 一九八三年十二月刊所収 一一四、一一六頁参照のこと。

- (20) 小山正明 前掲論文 一〇四頁。

- (21) 東アジアにおける綿製品の消費類型（太糸―厚地綿布）を特に強調する論考に、川勝平太「十九世紀末葉における英國綿業と東アジア市場」——『社會經濟史學』第四十七卷第二號（一九八一年八月三十日）、同「アジア木綿市場の構造と展開」——『社會經濟史學』第五十一卷第一號（一九八五年六月十日）などがある。中國にも有効な一つの視點である。

- (22) 小山正明 前掲論文 七一、七六頁。

- (23) 許濂新、吳承明主編『中國資本主義發展史』第一卷中國資本主義的萌芽 人民出版社 一九八五年九月刊 三二二、三三四頁。土糸生産量は、棉花消費量から落棉率五パーセントでわりだし、それを綿布の商

品化率五二・八パーセントで商品用と自家用にわけた。

- (24) 前掲拙著 一三四頁。

- (25) 嚴中平 前掲書 一〇七頁。方顯廷『中國之棉紡織業』國立編譯館

民國二十三年十一月刊 五頁、金國寶『中國棉業問題』商務印書館民國二十五年十二月再版 一四、一五頁など。

- (26) 中井英基「清末中國綿紡織業について——民族紡不振の原因再考」——北海道大學文學部『人文科學論集』第十六號（一九七九年） 六三頁。

- (27) 橋本奇策『清國の棉業』吉岡實文館 明治三十八年十一月二版 六九頁。一九〇五年以前の「花貴紗賤」のメカニズムについては、中井英基「清末の綿紡績企業の經營と市場條件——中國民族紡における大生紗廠の位置」——『社會經濟史學』第四十五卷第五號（一九八〇年二月二十九日） 六〇、六一頁参照。

- (28) 橋本奇策 前掲書 七〇頁。

- (29) 日本綿糸の中國市場進出については、副島圓照「日本紡績業と中國市場」——『人文學報』第三三號（一九七二年）を参照。

- (30) 前掲拙著 一四六頁参照のこと。

- (31) 愛國布については、林原文子「宋則久と天津の國貨提唱運動」——『五四運動の研究』第二函所収、第三章および同「愛國布の誕生について」——『神戸大學史學年報』創刊號（一九八六年五月）が周到である。

- (32) 日中間の綿糸價格については、前掲拙著 二八頁参照のこと。また「在華紡」の進出と中國綿製品市場の變化については、西川博史『日本帝國主義と綿業』ミネルヴァ書房 一九八七年一月 第四章が詳しい。

- (33) 前掲拙著 一四六頁。

- (34) 高陽については吳知著、發智善次郎等譯『鄉村織布工業の一研究』東亞研究叢書第九卷 岩波書店 昭和十七年刊をはじめとして、汗牛充棟の感があるので、一々は記さない。濰縣については、「山東濰縣之

織布業」——『紡織時報』第一〇〇六號(民國二十二年七月二十四日)、『山東濰縣之織布業』——『工商半月刊』第六卷第一號(民國二十三年一月一日)、錢承緒「視察山東濰縣紗紗報告」——『紡織時報』第一〇七一號(民國二十三年三月二十六日)、濱正雄「山東省濰縣地方の機業に就て」——『東亞』第八卷第六號(昭和十年六月一日)、郭秀峰「山東濰縣土布業概況」——『紡織時報』第一二一六號(民國二十四年九月六日)、第二二七號(九月九月)、第二二九號(九月十六日)、『濰縣織布業之過去及將來』——『紡織時報』第一三〇六—一三〇八號(民國二十五年八月六日—八月十三日)、堀内清雄、富永一雄「山東省濰縣に於ける織布業の變遷」——『滿鐵調査月報』第二十二卷第一號(昭和十七年一月一日)、後藤文治「濰縣に於ける線莊業」上、中、下——『滿鐵調査月報』第二十三卷第六—八號(昭和十八年六月一日—八月一日)などがある。

- (35) 青島「在華紡」綿糸の高番手化については、前掲拙著 一六八—一六九頁参照のこと。濰縣での高番手綿糸使用に關しては、趙岡、陳鍾毅『中國棉業史』聯經出版事業公司 民國六十六年七月刊 二二一頁参照。

- (36) 二十番手超過でいうと、第十三表の九パーセントに對し、第十四表の一九三二年は八・四パーセントと、若干ひくい。第十三表は生産高比率で、第十四表は出荷高比率であったことを想起すれば、この差は兼營織布の原糸に出荷分よりも多い比率の二十番手超過が使用された結果と解釋できる。

- (37) 趙岡、陳鍾毅 前掲書 三〇〇頁。

- (38) 嚴中平 前掲書 二九三頁。

- (39) 專營織布工場の自動織機の増加、メリヤス業の發展などといった要因も、當然視野にいれる必要があるが、いまは計上しない。

- (40) *Decennial Reports 1922—31*, I p. 182.

- (41) 周知のとうり、一九三〇年代における輸入綿布の急激な減少は、關稅

自主權獲得にともなう關稅の數次にわたる大幅な引上げが直接の原因であった(嚴中平 前掲書 二一九頁)。しかし、見落してならないのは、輸入綿布激減のあとをうめる國內兼營織布の態勢が、すでに一九二〇年代後半から形成されていた點である。

- (42) 土糸の十九世紀における半減については、Albert Feuerwerker "Handicraft and Manufactured Cotton Textiles in China, 1871—1910" *Journal of Economic History* Vol. 30 No. 2, June 1970 が先驅的であり、中井英基「中國農村の在來綿織物業——清末民國期を中心に」——安場保吉、齊藤修編『プロト工業化期の經濟と社會 國際比較の試み』數量經濟史論集三 日本經濟新聞社 昭和五十八年四月刊がこれを支持する立場から發展させ、さらに二十世紀における土糸の絕對量不變を推計している。

- (43) 嚴中平 前掲書 一一九頁の推計は、メリヤス業等の原糸を七二萬四千公擔—一九萬七千公擔とみつもっているが、ここでは趙岡等 前掲書 二四八頁の推計を援用して、メリヤス業等の原糸を、機械製綿糸國內總供給高の一〇パーセントとみなして計算する。

- (44) 一九二九年の河北省を例にとると、土糸の殘存率は、商品用土布をはほとんど生産していなかったものと思われる御河區、山東鄰接區では、それぞれ九八・三パーセント、一〇〇パーセントと非常にたかく、高陽をふくむ西河區、寶坻をふくむ西北河區という二つの代表的な商品用織布地帯では、それぞれ三八・八パーセント、六・六パーセントとかなり低い。河北省全體の消費量では、機械製綿糸の六三萬五千市擔に對し、土糸は四二萬三千市擔で、六對四と、一九三四、三五年の全國平均にはほぼ一致する(畢相輝「高陽及寶坻兩個棉織區在河北省鄉村棉織工業上之地位」——『天津大公報』民國二十三年十月十七日。のち『紡織時報』第一二三九、一一四〇號に轉載)。

この論文は、「民國初期の文化と社會」共同研究班(狹間直樹班長)の報告である。